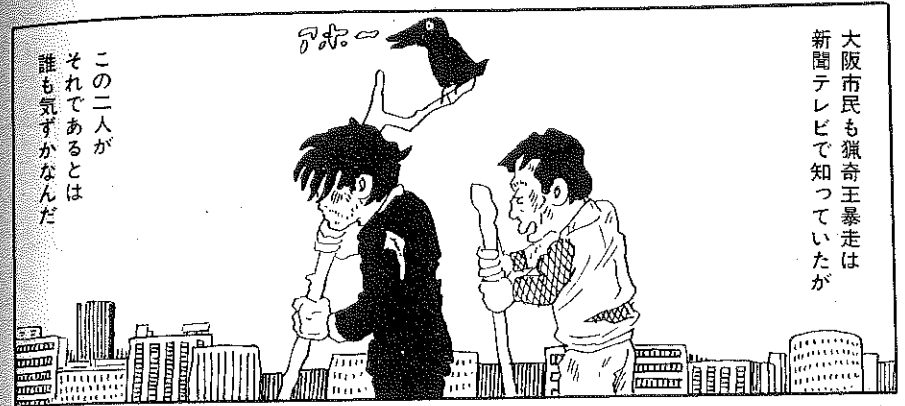


大阪獵奇戦争

ロマンの日は遠く

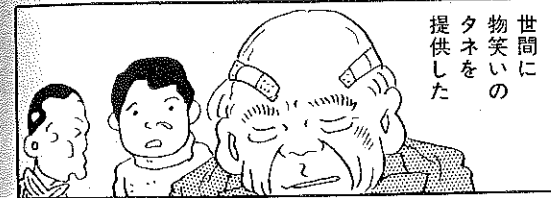


獵奇王と
忍者は
中部山地に
まよいこみ
信濃飛騨美濃
をへ京都に出
さらに
山路を
えらんだため
丹波山地で
方向を失い
日本海へ
首を
つつこみ
アジトの
大阪へ
入ったのは
三ヶ月後だった

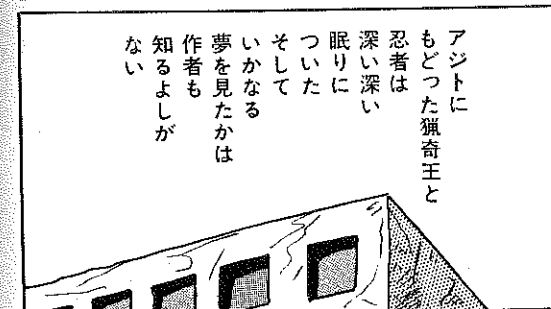


大阪市民も獵奇王暴走は
新聞テレビで知っていたが

この二人が
それであるとは
誰も気づかなかった



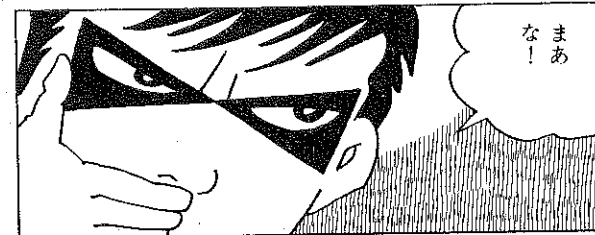
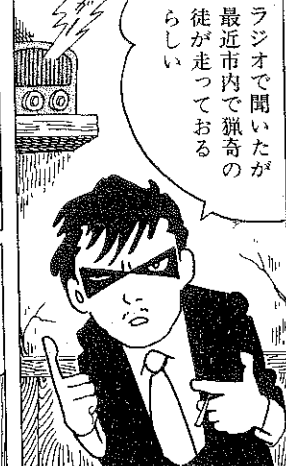
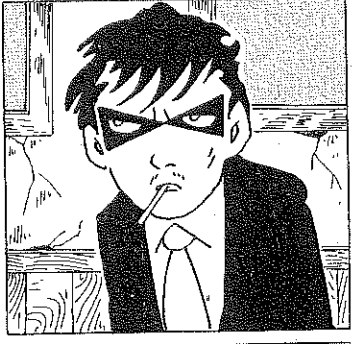
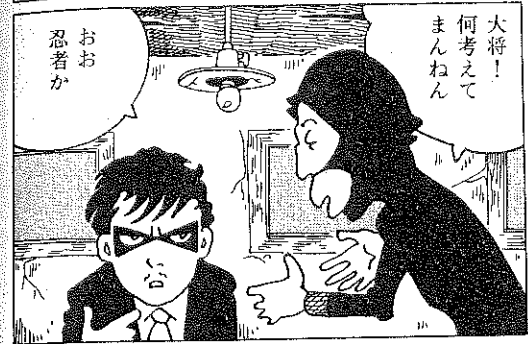
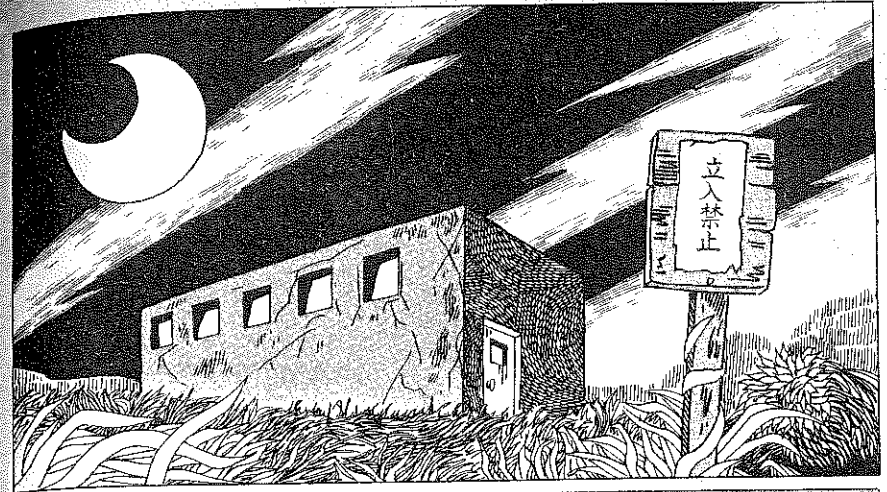
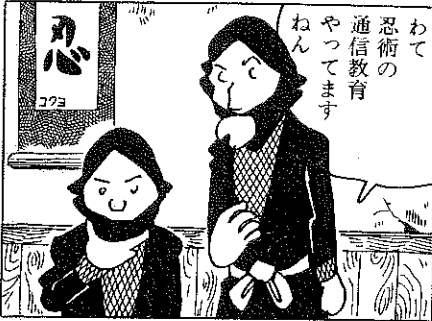
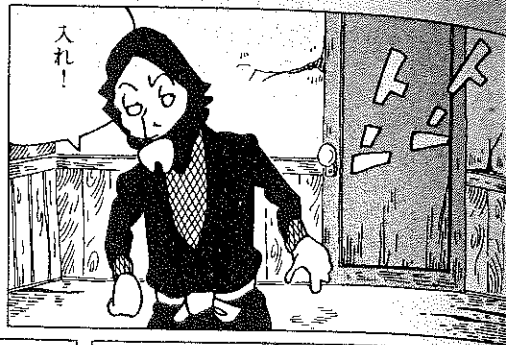
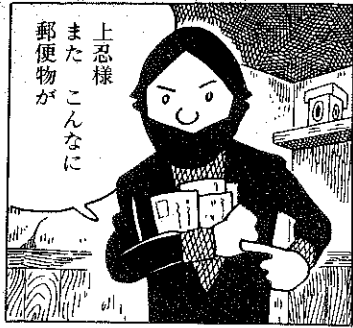
世間に
物笑いの
タネを
提供した

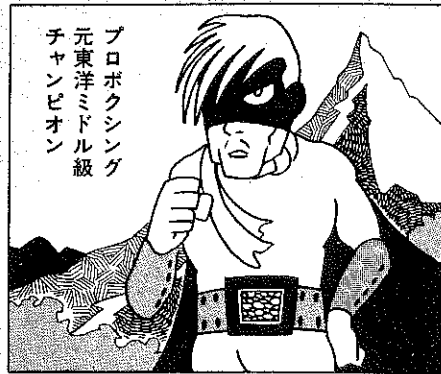


アジトに
もどった獵奇王と
忍者は
深い深い
眠りに
ついた
そして
いかなる
夢を見たかは
作者も
知るよしが
ない

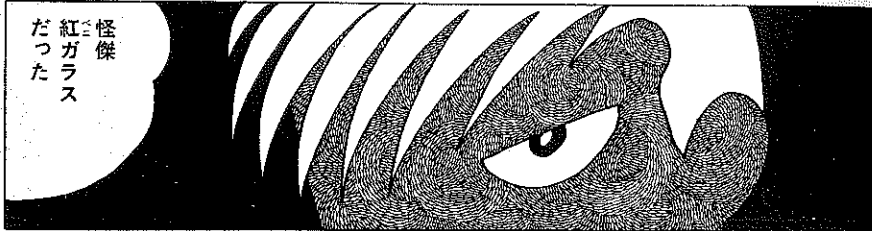
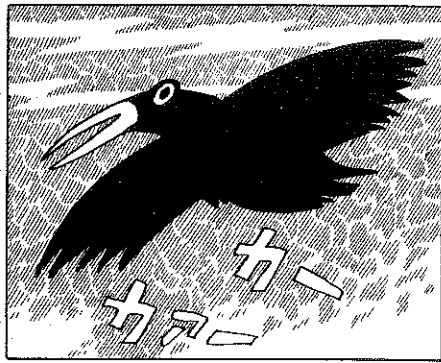


沢村探偵は
暴動の
責任者と
して
警視庁公安課
で汗を
しぼられ

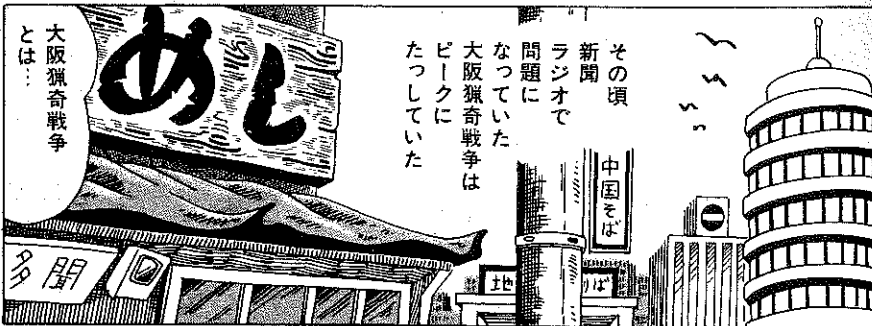




プロボクシング
元東洋ミドル級
チャンピオン



怪傑
紅ガラス
だった

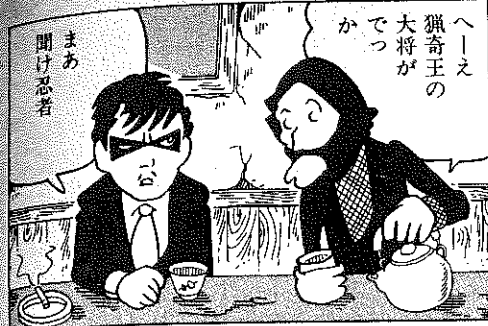


大阪狼奇戦争
とは...

その頃
新聞
ラジオで
問題に
なっていた
大阪狼奇戦争は
ピークに
たっていた

中国そば

その邪悪な狼奇界へ
正義のメスを入れよう
とする男がいた

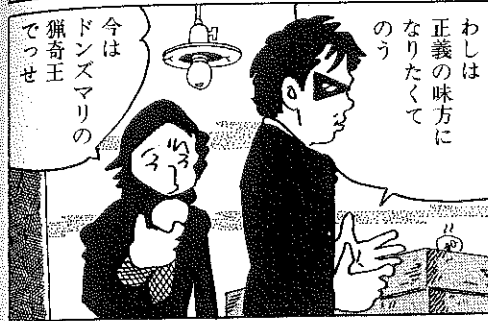


まあ
聞け忍び

へーえ
狼奇王の
大将が
でっ
か



わしも昔
探偵の
通信教育を
受けた事が
ある



今は
ドンズマリの
狼奇王
でっせ

わしは
正義の味方に
なりたくて
のう



あれは
夢多き
黄金の
日々じゃっ



この世に
正義が
存在すると
本気で
思っていた
もんじゃ

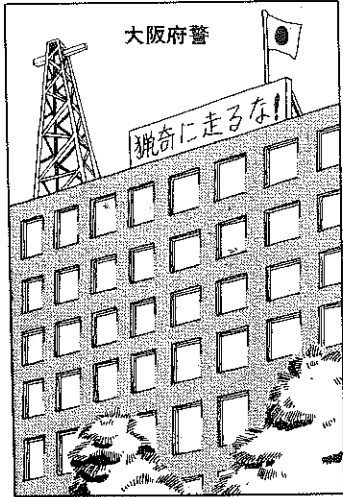
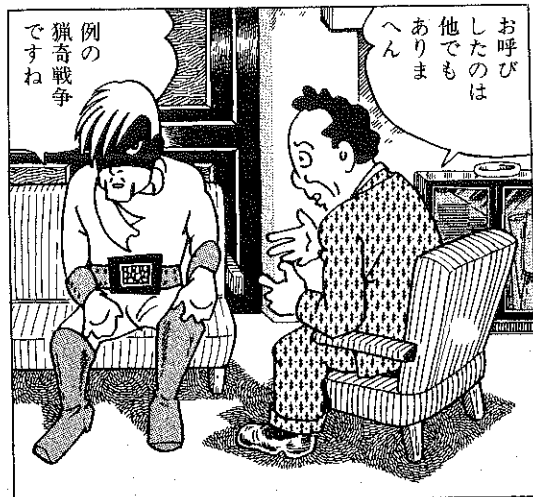
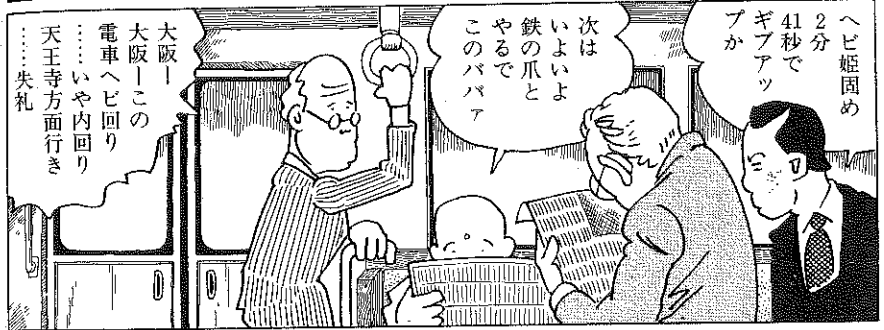
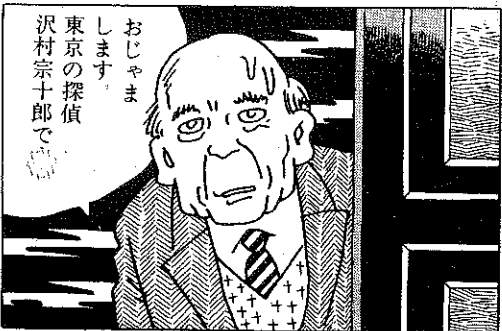
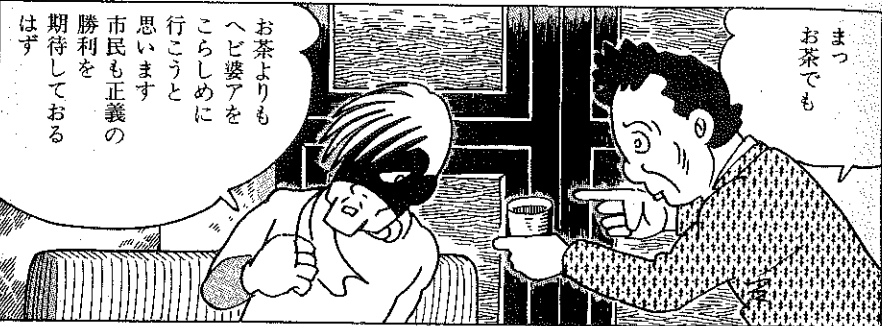


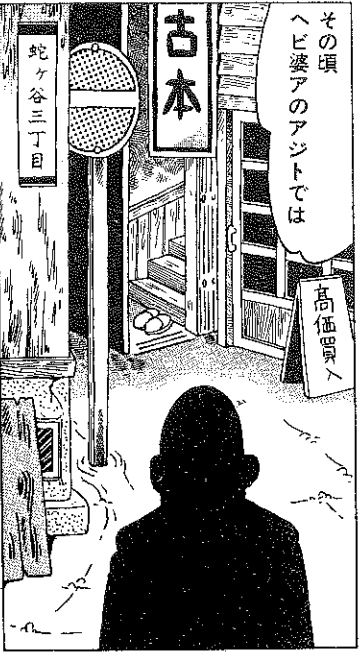
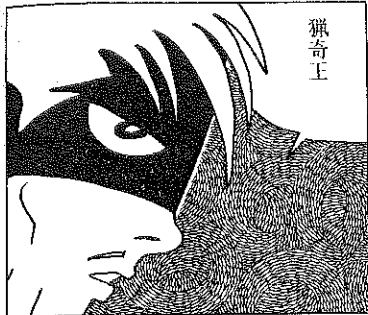
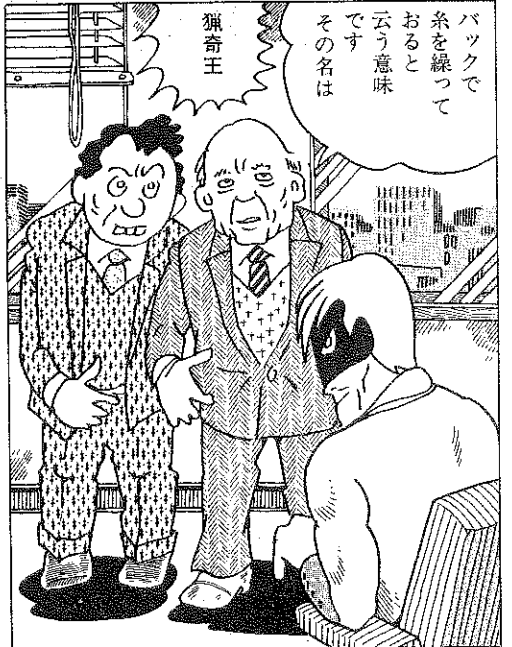
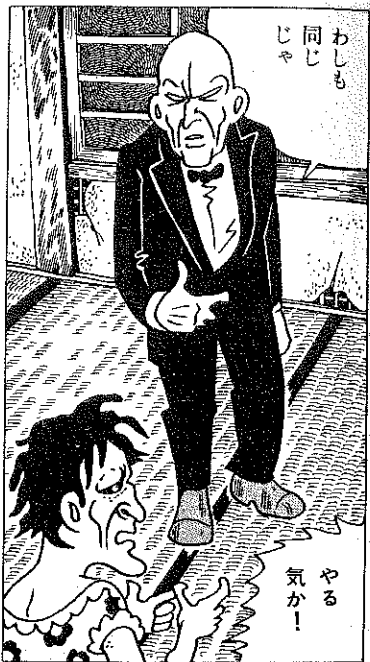
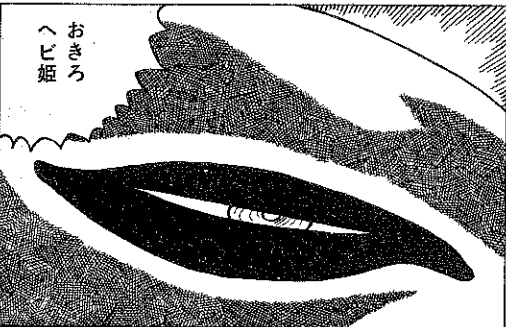
邪悪な世界は
正義の世界より
うそが少ないと
思うからよ

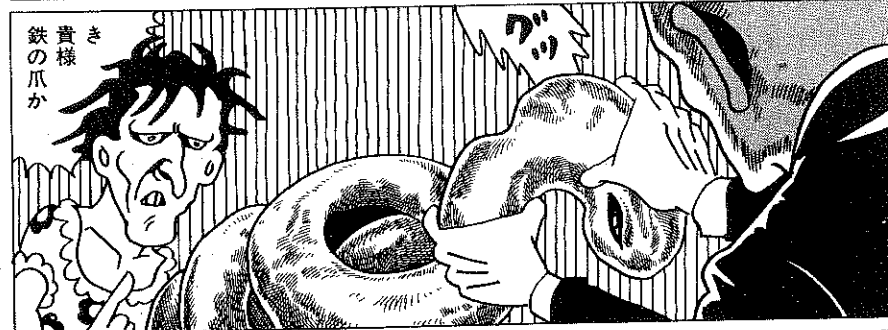
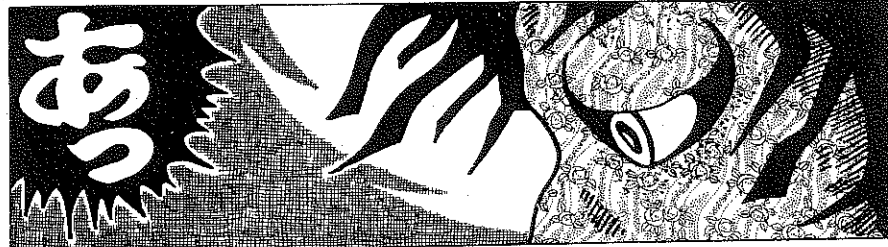
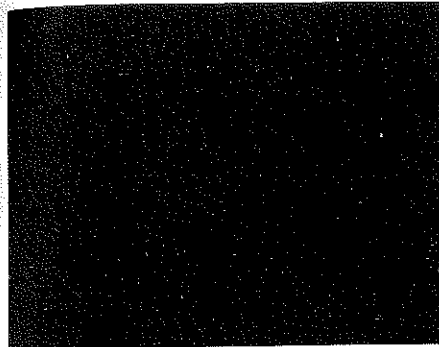
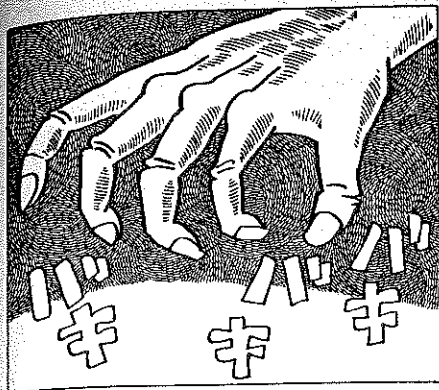
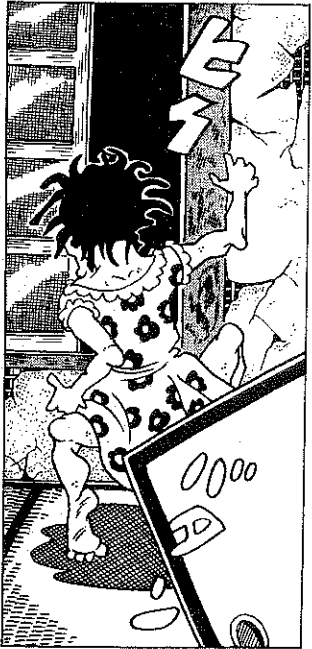
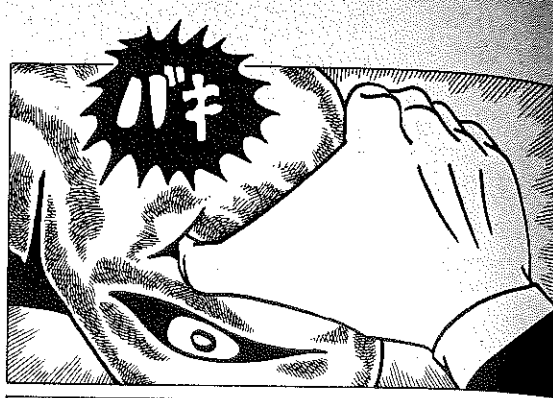
正義は
つかれる

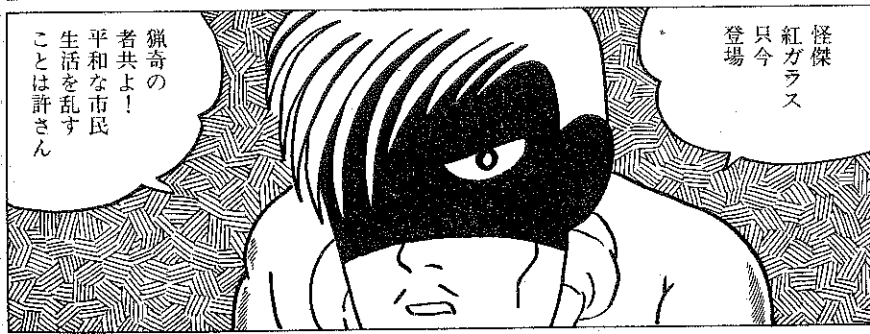
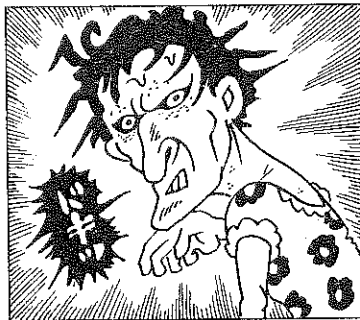
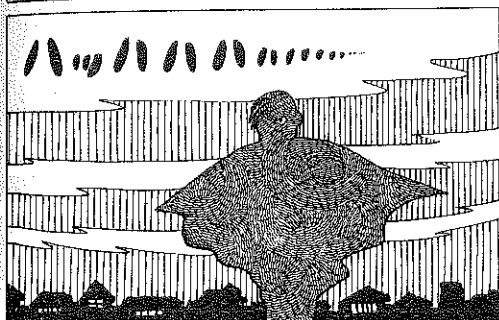
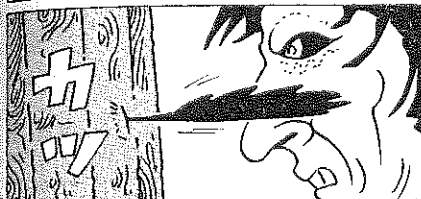
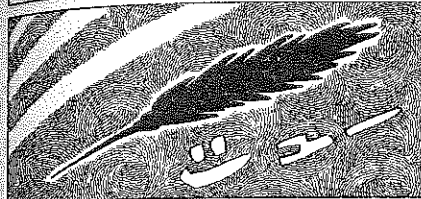
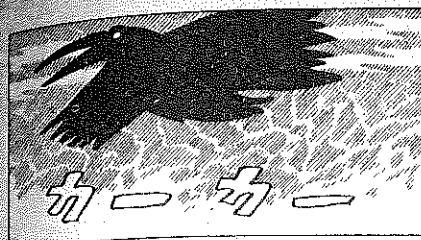
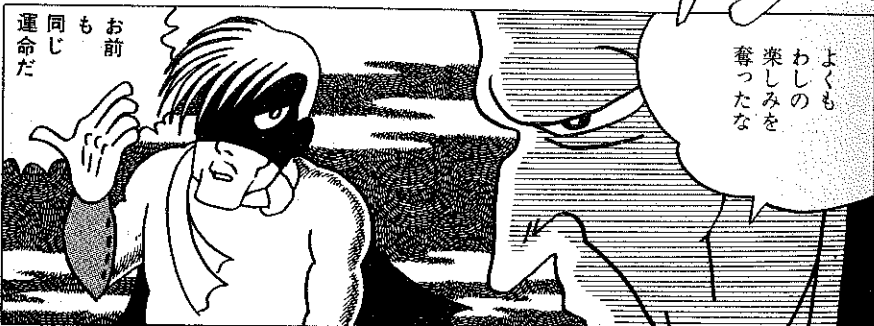
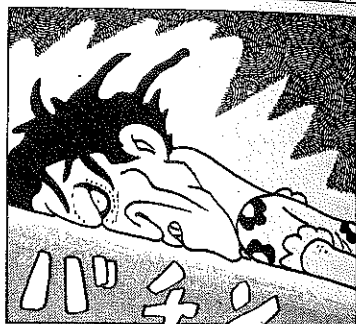
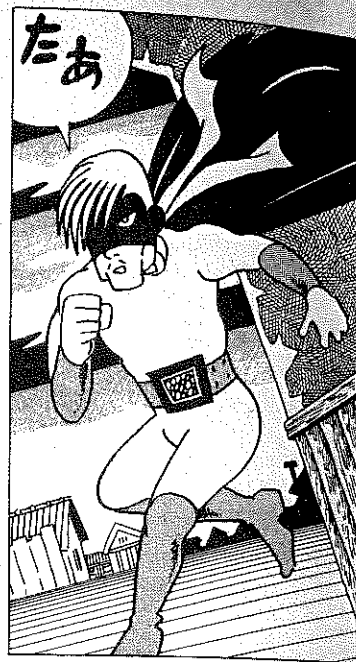
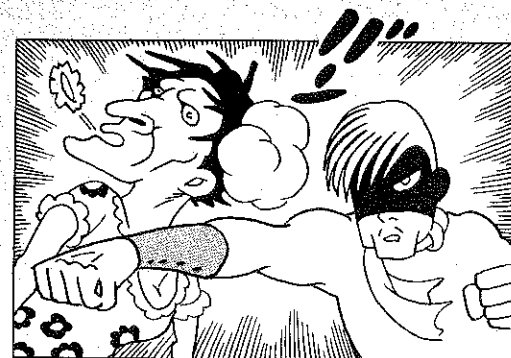


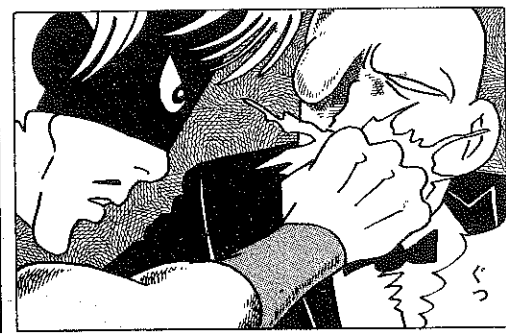
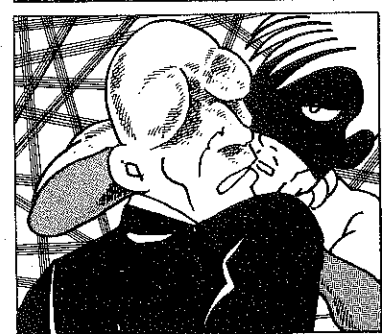
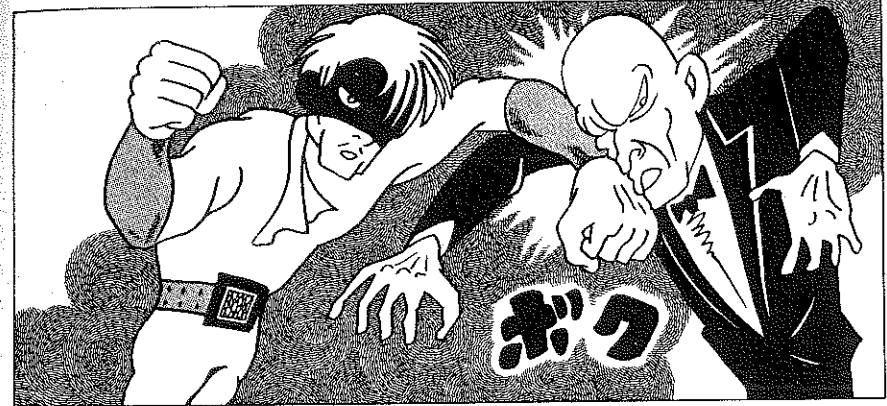
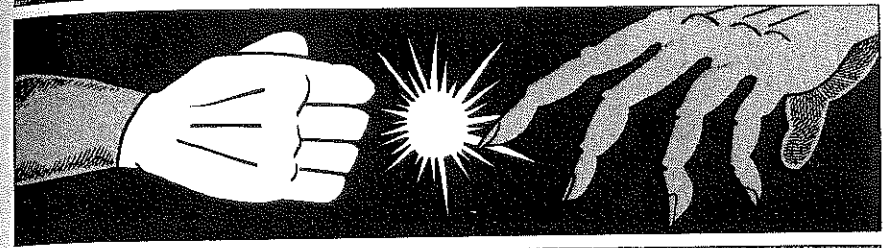
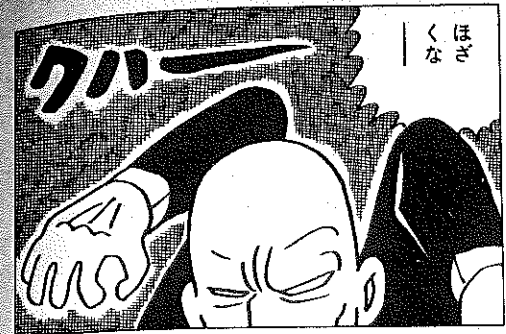
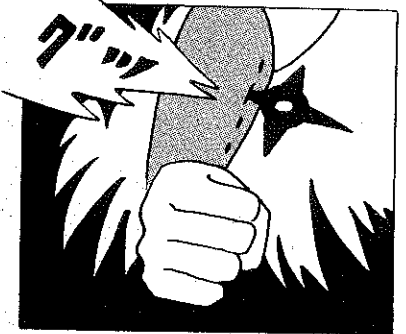
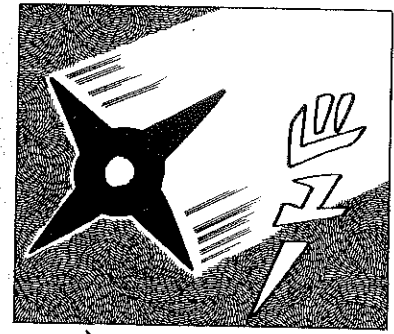
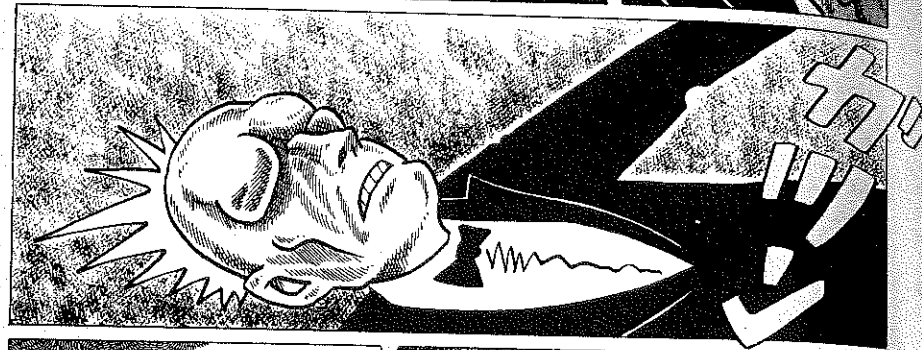
それが又
なんで
邪道へ
踏み込んだの

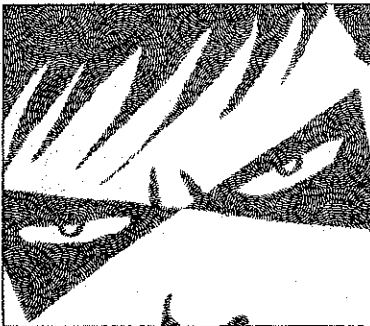
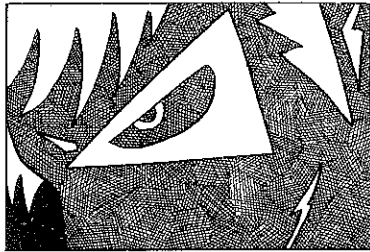
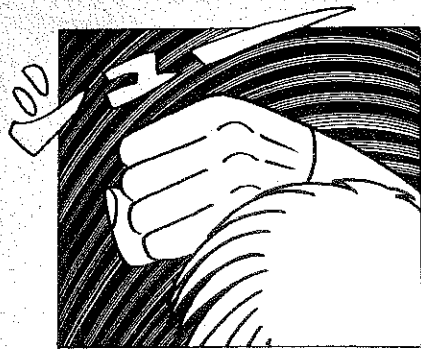












だまらんか
邪悪のルートツ！
正義のパンチ
右フック
受けてみい



カチ



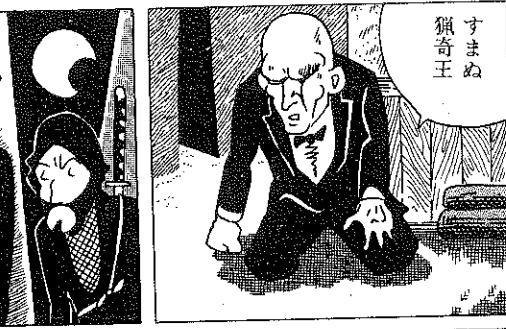
紅ガラス
とか
云ったな



正義は
斬る！



鉄の爪
猟奇界の
よしみじゃ
加勢するぞ



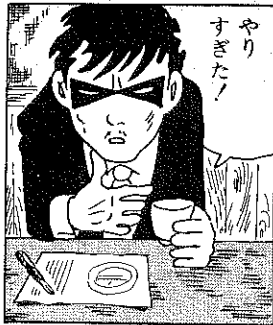
すまぬ
猟奇王



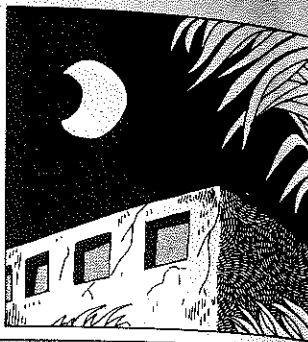
カチ



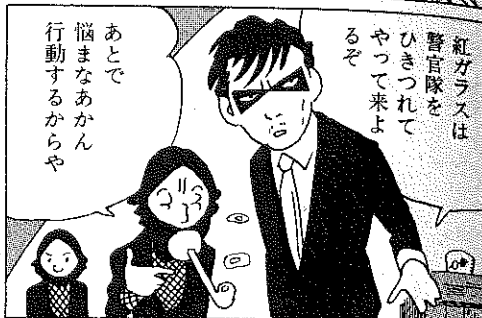
正義の味方を斬るからや



やりすぎたノ



しかし、かつこ良かったであろうあのシーン



あとで悩まなあかん行動するからや

紅ガラスは警官隊をひきつけてやっ来てよるぞ

酔いしれて前後を忘れていた



猟奇界は元来組織では動かぬ例外的に大都会にのみ存在する

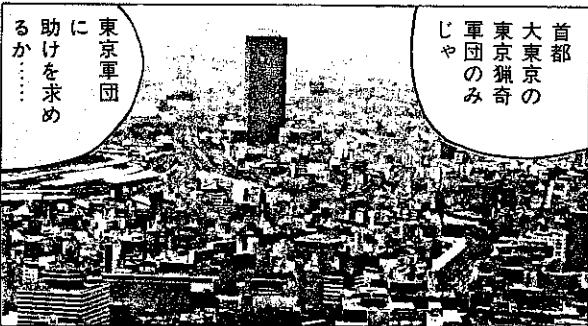


？ 猟奇側の味方は他にいらんのか



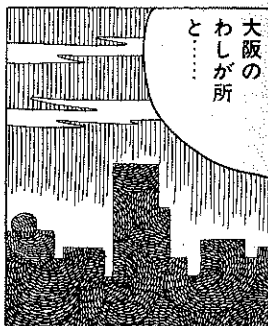
そのシーンのためにアジト襲撃されまんねんで大将！

云うな忍者！そこが猟奇道じゃ

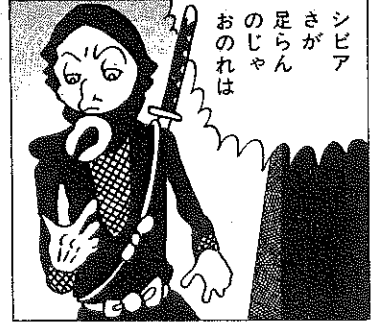
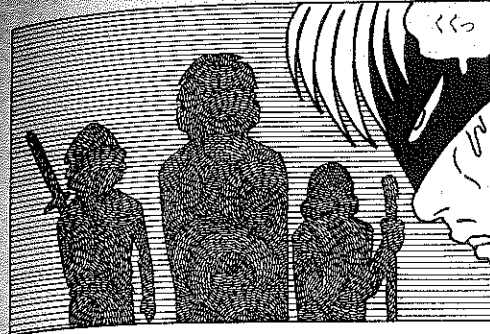


東京軍団に助けを求めるか……

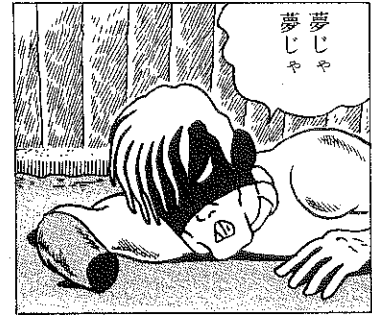
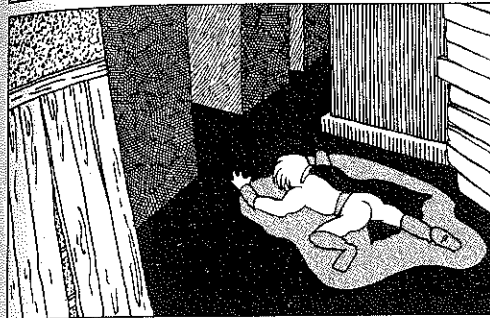
首都大東京の東京猟奇軍団のみじゃ



大阪のわしが所と……



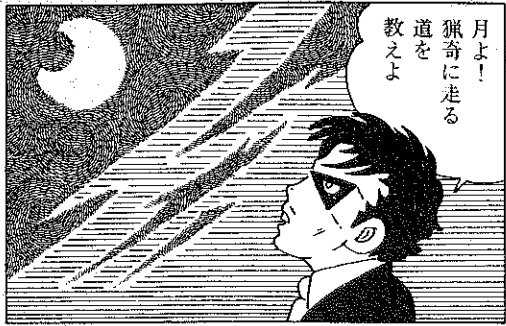
シビアさが足らんおのれはのじゃ



夢じゃ夢じゃ



正義の味方が斬られると云う一大惨事に小市民は一種の快感をおぼえ。何ぞ面白い世界が見れるのではないかと期待した



月よ！
獵奇に走る
道を
教えよ



捜査は
来なかった



このアジトを
見つけられぬ
先に打って出
よう



獵奇王
紅ガラスが
アジトへ
向って
来る

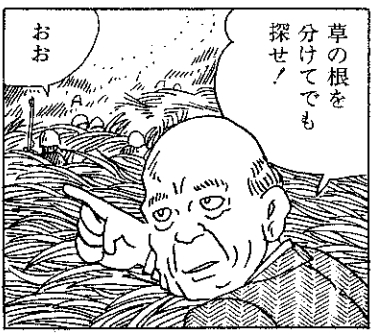
そう
か……



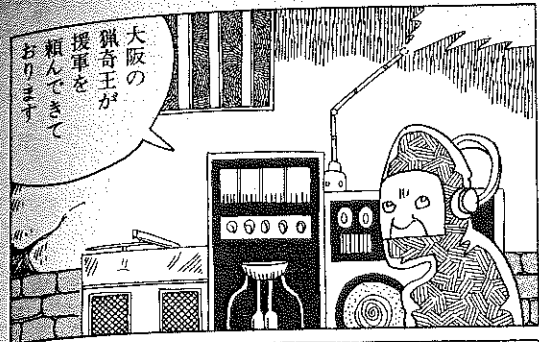
そこへ
紅ガラスが
はじめて
メスを入れよう
としている



以前より
獵奇王の
アジトは
大阪城西側の
元軍工場跡の
大草原地帯で
あると知られてい
いたが
草深く中へ踏み込ん
でも うっそうたる
雑草の向うに
その姿を発見した
者はいなかった



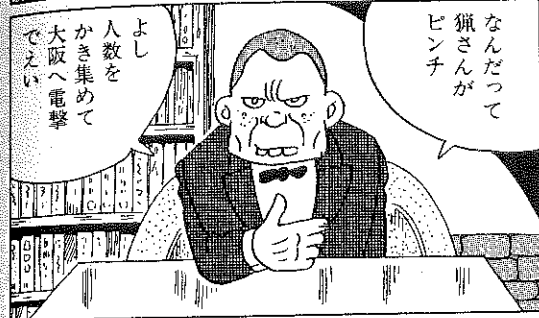
草の根を
分けてでも
探せ！
おお



大阪の
獵奇王が
捜査を
頼んできて
おります

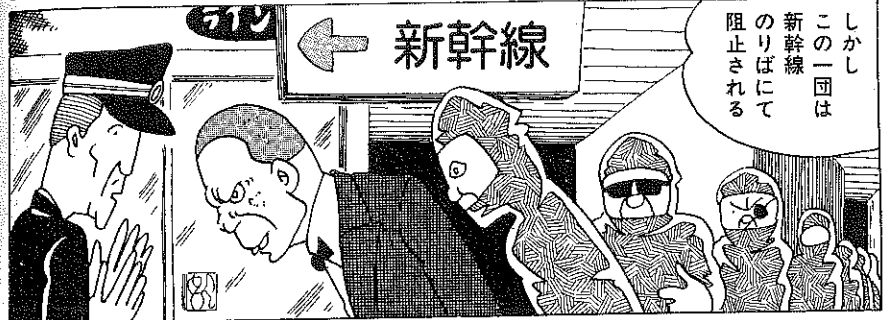
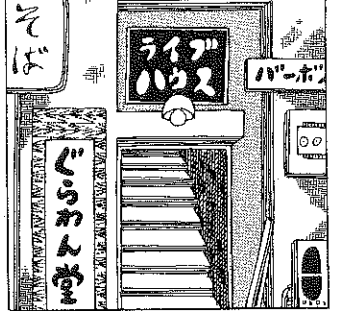


東京軍団のアジトは
吉祥寺のライブハウスの
三階に存在した

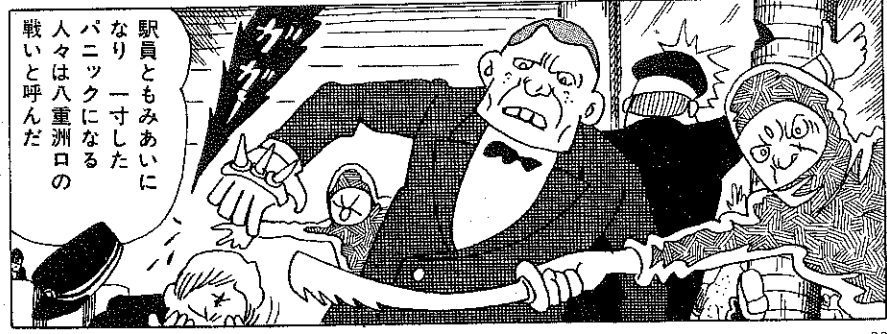


なんだって
獵さんが
ピンチ

よし
人数を
かき集めて
大阪へ電撃
でい



しかし
この一団は
新幹線
のりばにて
阻止される



駅員ともみあい
になり一寸した
パニックになる
人々は八重洲口の
戦いと呼んだ



なんだ
急に!

信用
できぬ



イライラ
するな
紅ガラス!
いずれ見つか
るのだ

まだアジトは
見つから
ぬが

沢村
さん
どうな
っておる
のだ



沢村!
おのれは
正義の使者
怪傑紅ガラスに
説教しようと
云うのか!



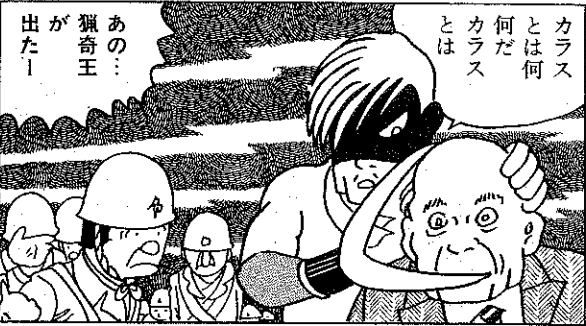
お前は狼奇王に
片腕を落とされ
た失点を
挽回しようと
あせっておるのじゃ
冷静さこそが
この場では重要じゃ



わしや
信用の
探偵じゃ

貴様
わしに
命令する
気が!

狼奇王に
関しての
テークア
ワスは
一番くわ



あ
の
狼
奇
王
が
出
た!

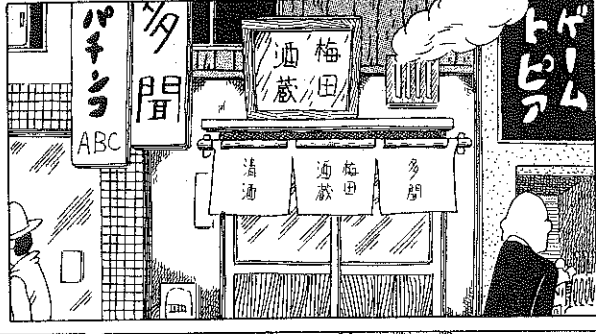
カラ
ス
とは
何
だ
カ
ラ
ス
とは



お
こ
る
な
カ
ラ
ス



おい!
また
狼
奇
王
が
走
ら
し
い
ぞ



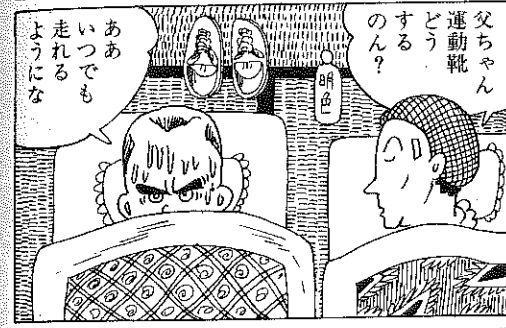
走る
で

そう
か
か
走
る



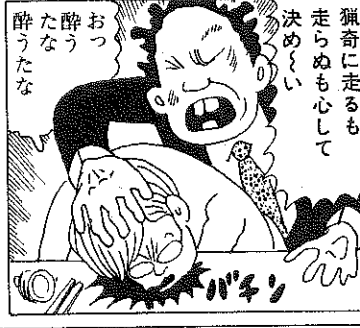
一連の
狼奇戦争の
バックは狼奇王
らしいんや!
こらもう
狼奇一族の陰謀やで
もう走るで走るで

なに
走る!



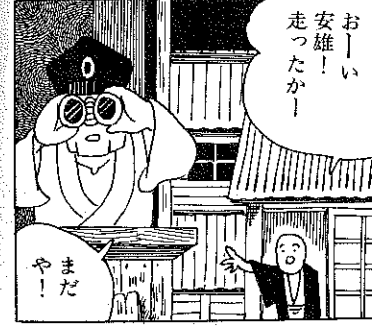
あ
あ
い
つ
も
走
る
よ
う
に
な

父ちゃん
運動靴
どう
す
る
の
ん?



お
っ
酔
う
た
な
酔
う
た
な

狼奇に走るも
走らぬも心して
決めろい



お
い
安
雄!
走
っ
た
か!

や
ま
だ

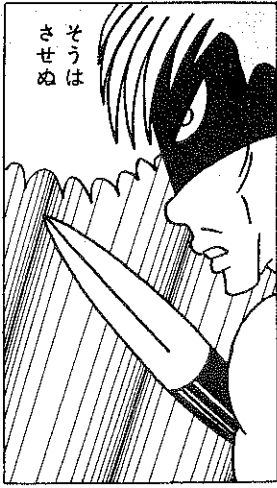


今夜は
狼奇の夜や
仕事なんか
できるけい

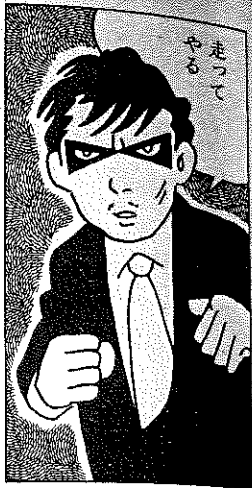
君ら残業と
ちがうのかね
今夜は
?ええ



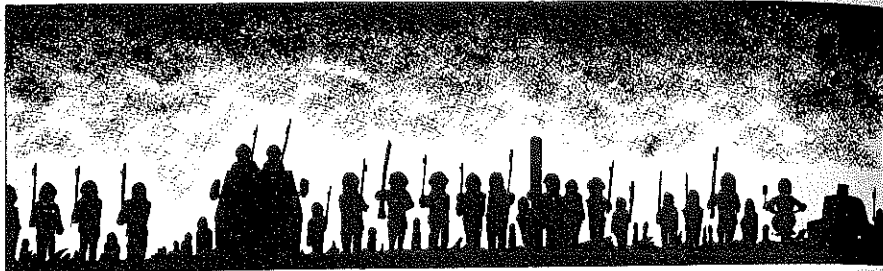
カラスの云う
とうりじゃ
獵奇王!
人数が
ちがうぞ
この戦い
獵奇一族の
最後じゃ



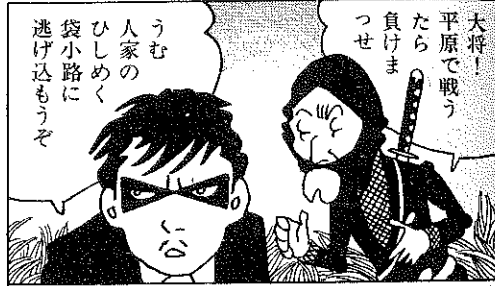
そうは
させぬ



走って
やる



しかし四方
お囲まれるぞ

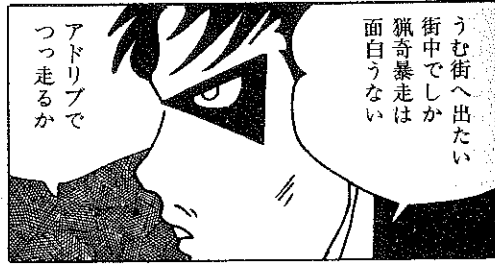


大将!
平原で戦う
たら
負けま
つせ
うむ
人家の
ひしめく
袋小路に
逃げ込もうぞ

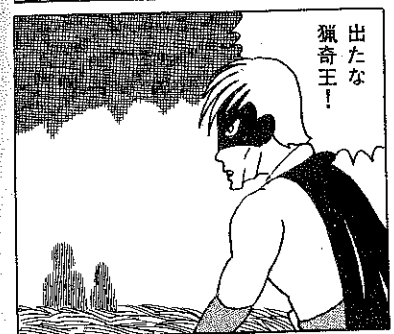
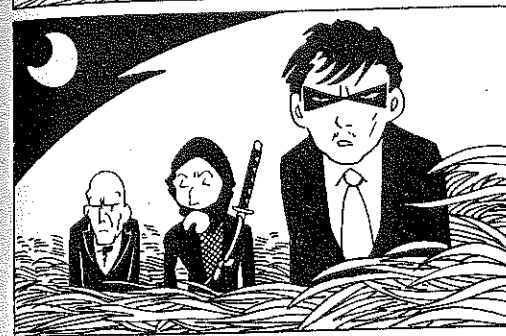
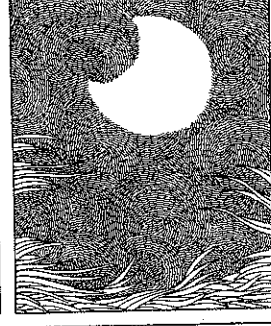


小便
してき
きたら
よかつた...

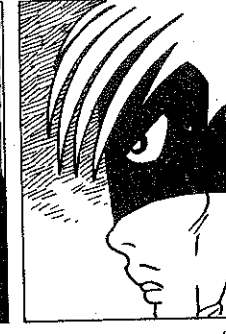
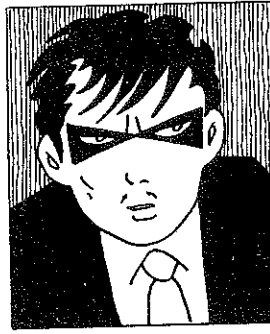
合点!

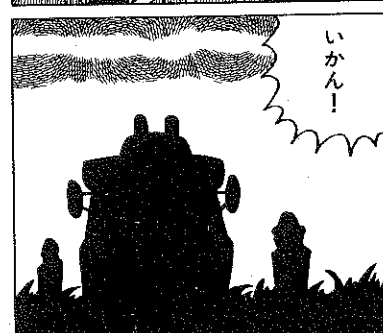
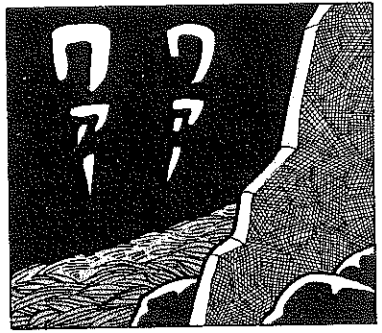
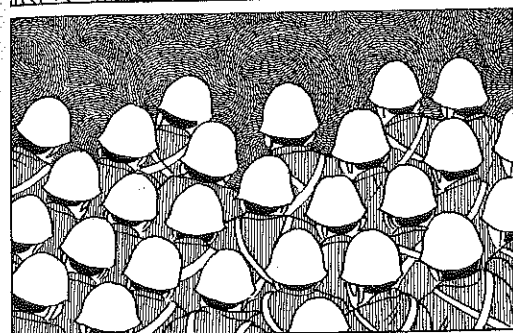
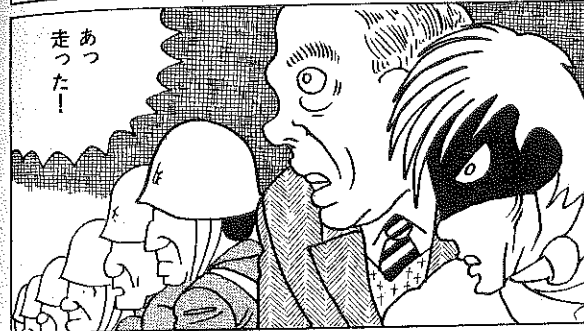
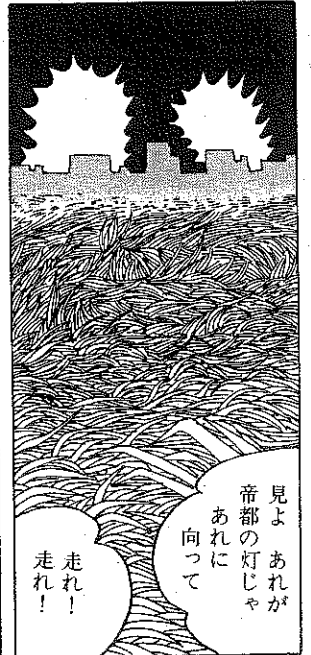
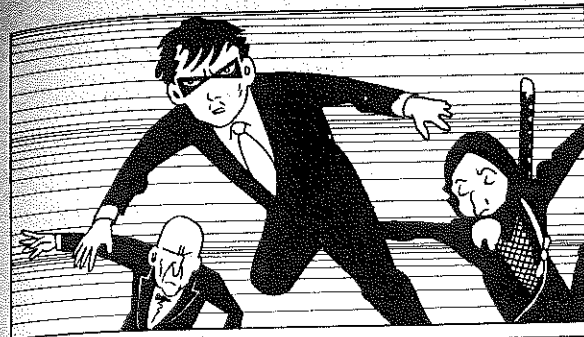
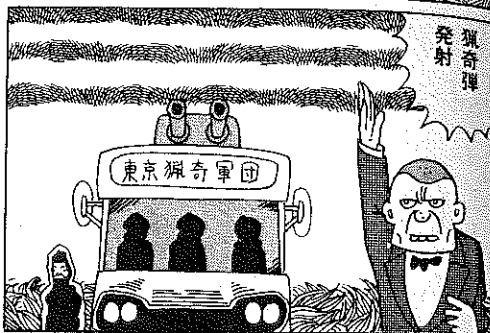
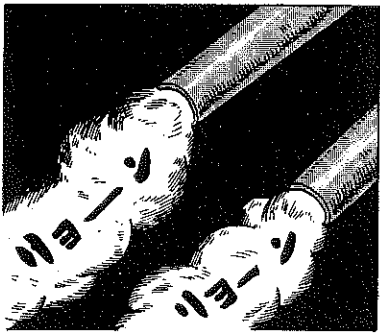
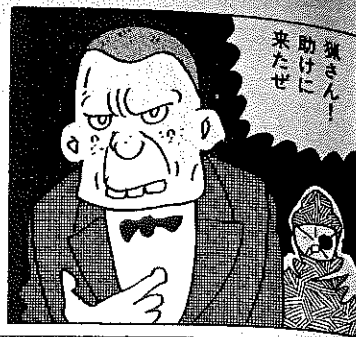
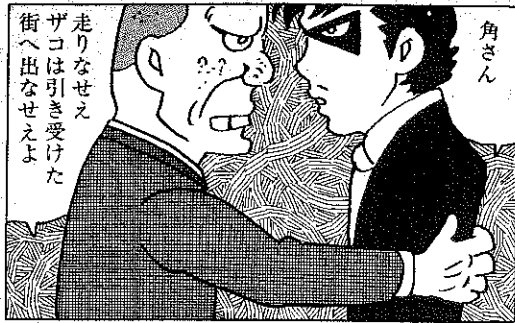


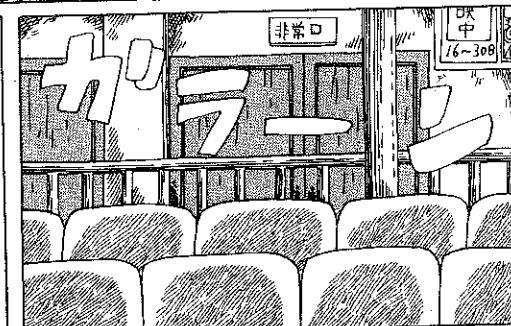
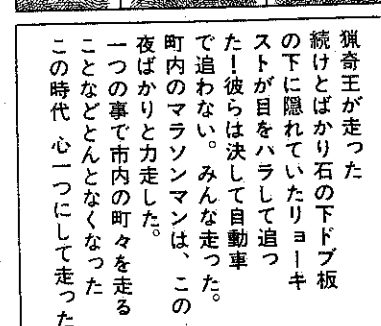
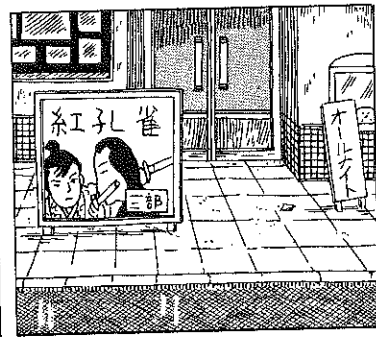
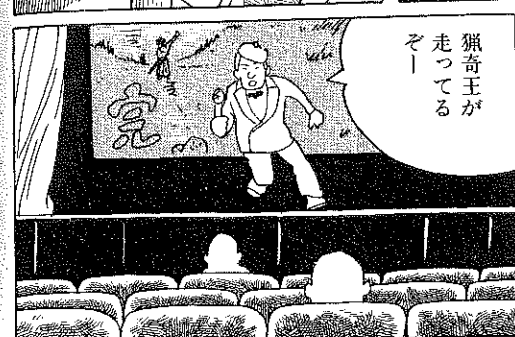
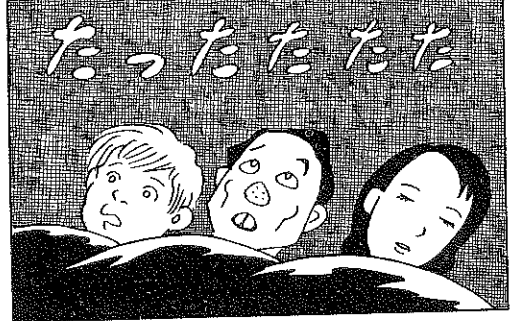
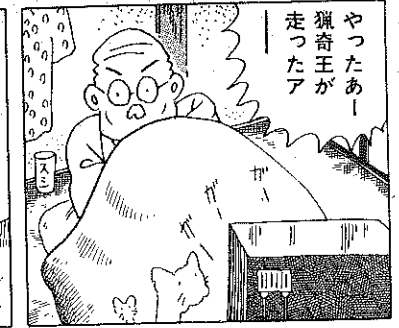
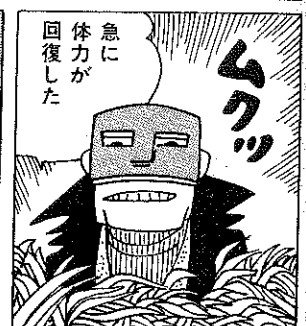
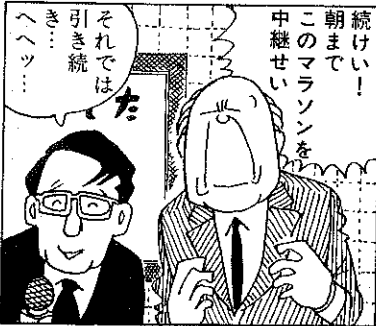
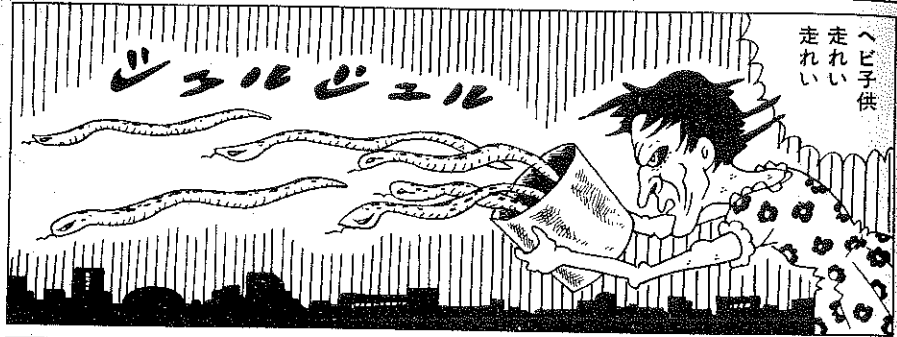
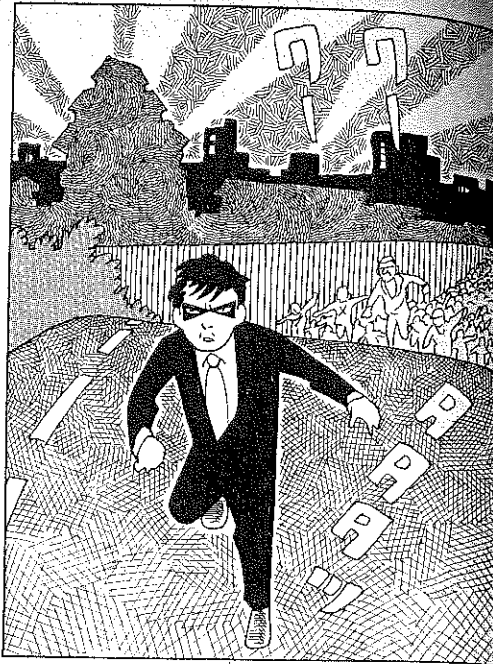
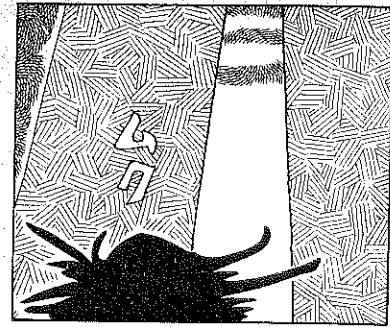
うむ街へ出たい
街中でしか
獵奇暴走は
面白くない
アドリブで
つつ走るか

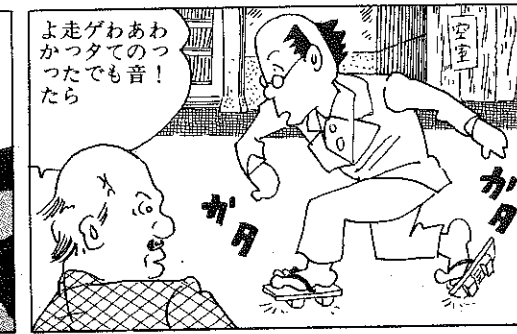
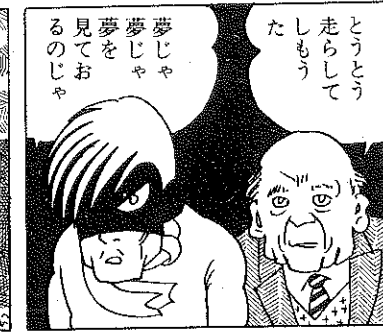
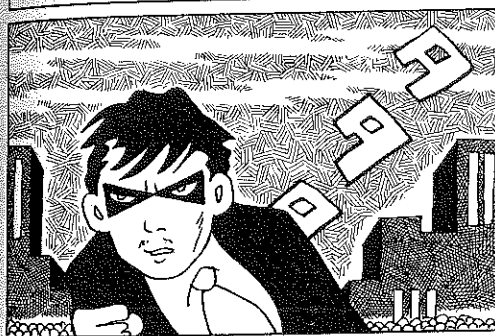
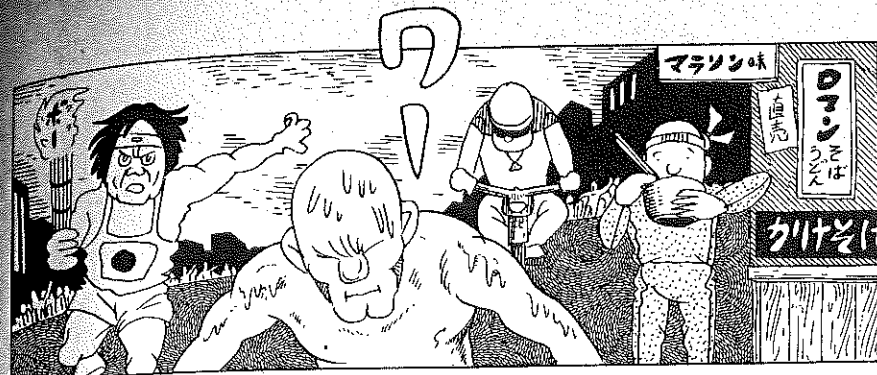
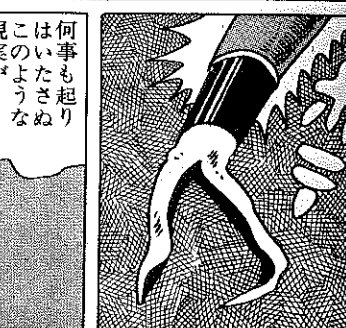
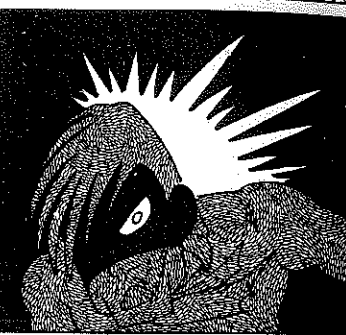
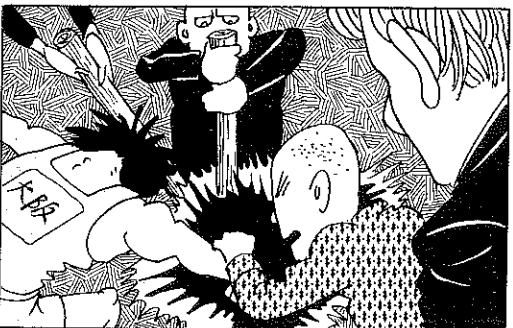
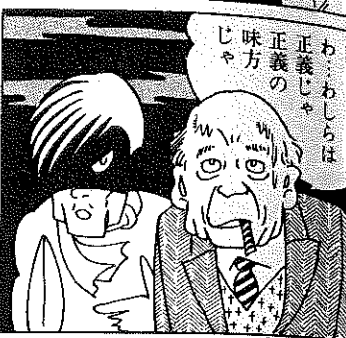


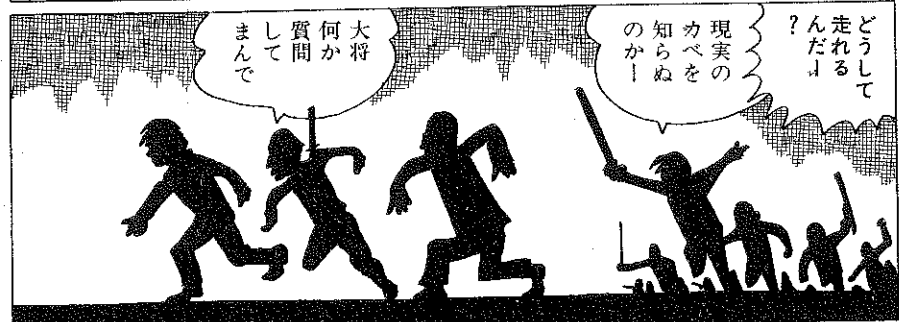
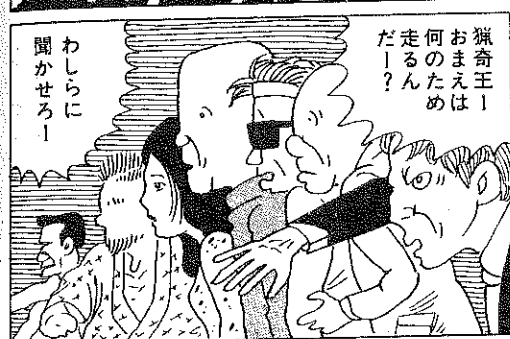
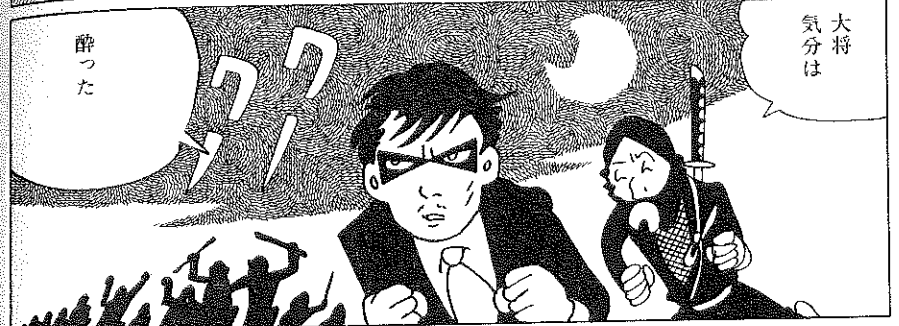
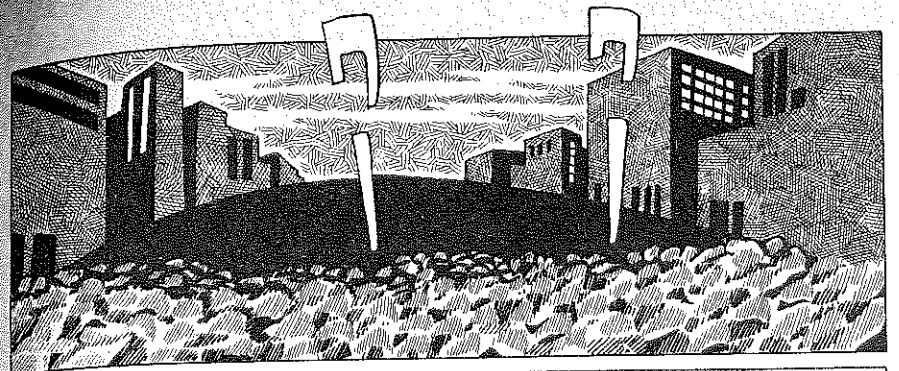
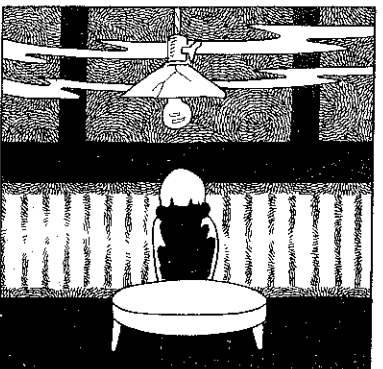
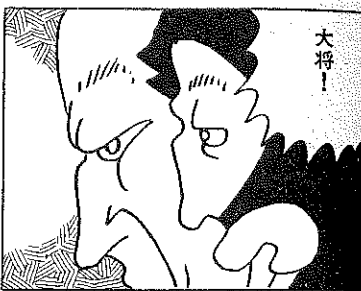
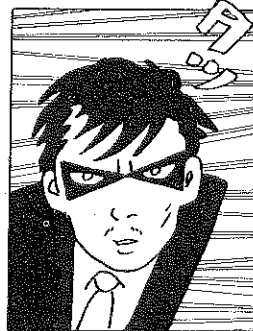
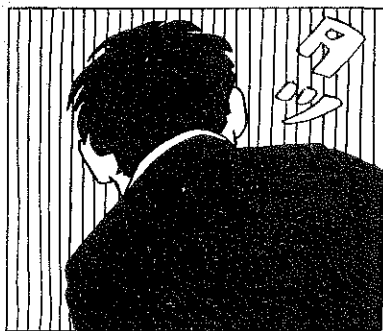
出たな
獵奇王!

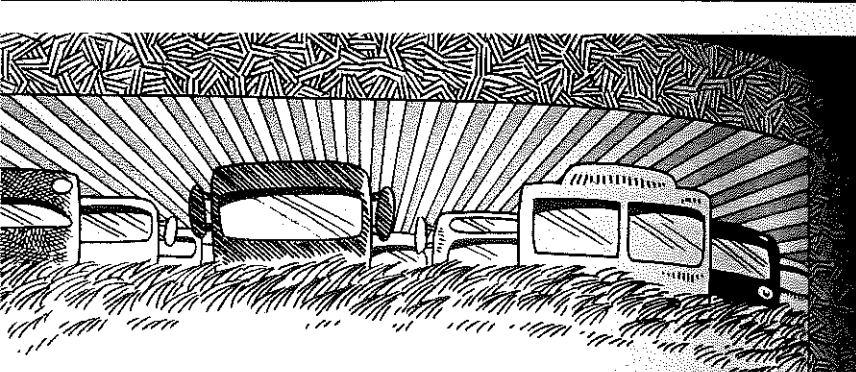




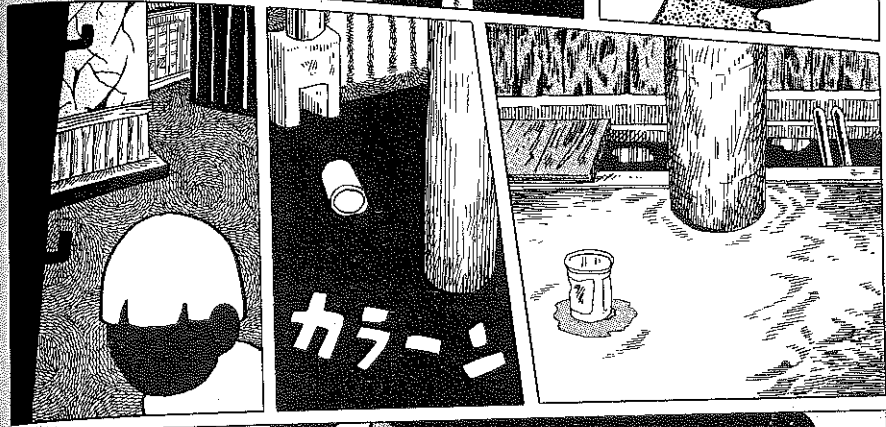
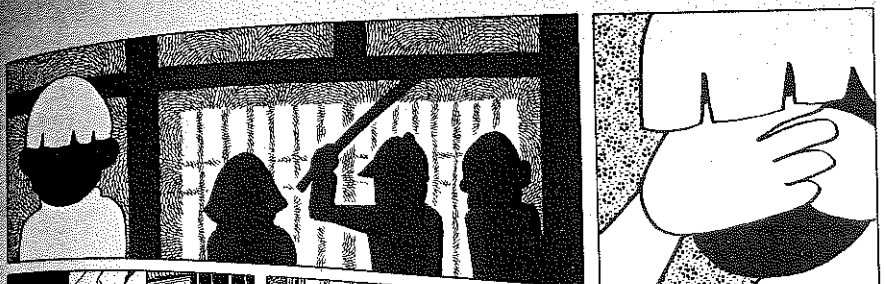
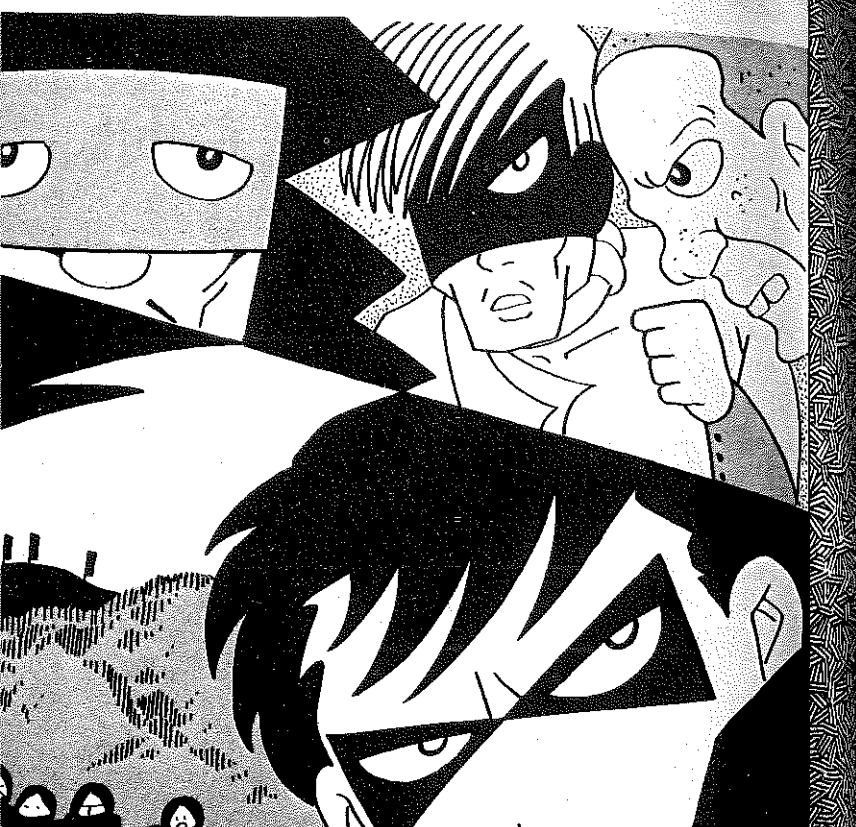








原が奇獵

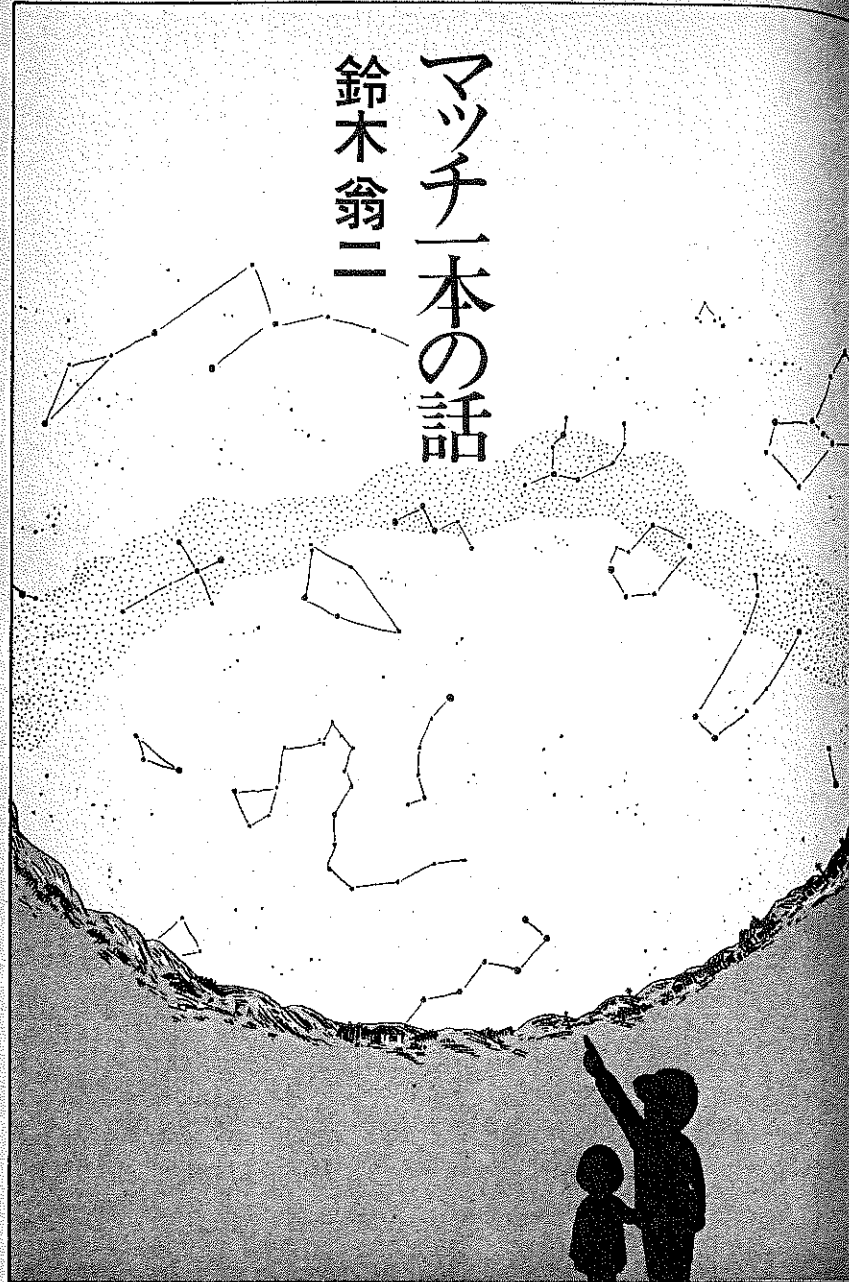


ただ
走りたかった
だけじゃ

月日が流れ
時代が変り
人も行方を
知らぬまま
どこかへ向う
そこに何が
あるのか
ないのか
知る術もない
その遠い時代
とり残された
男は
流れに乗れず
黒い背広と
黒いマスクで
薄暗い路地裏の
隅より
月夜に
走り出て
黄金時代を
再現したと云う

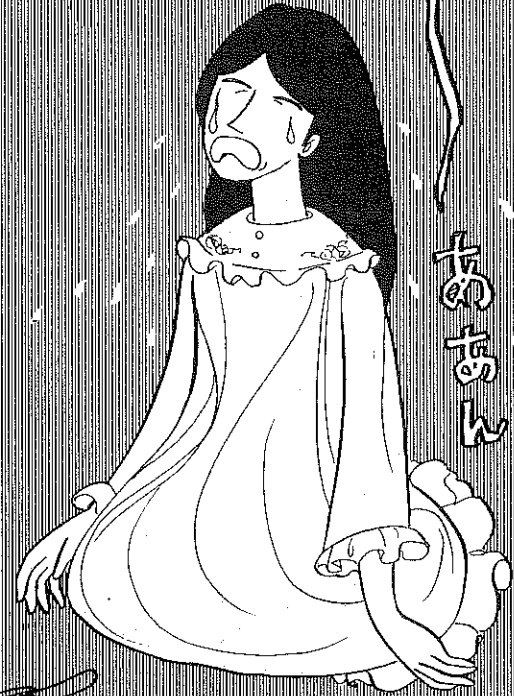
マッチ一本の話

鈴木翁二

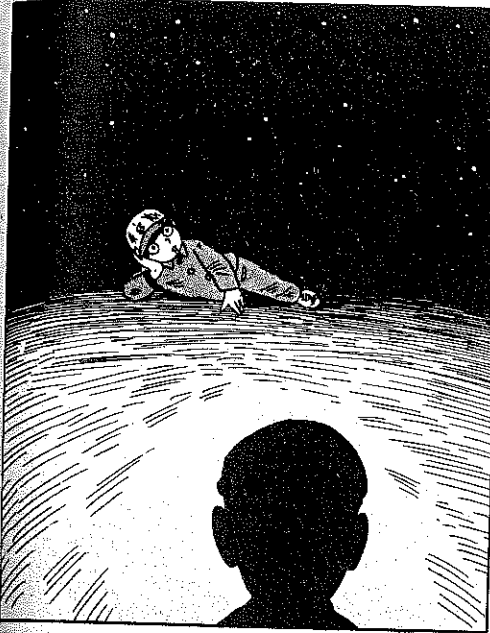
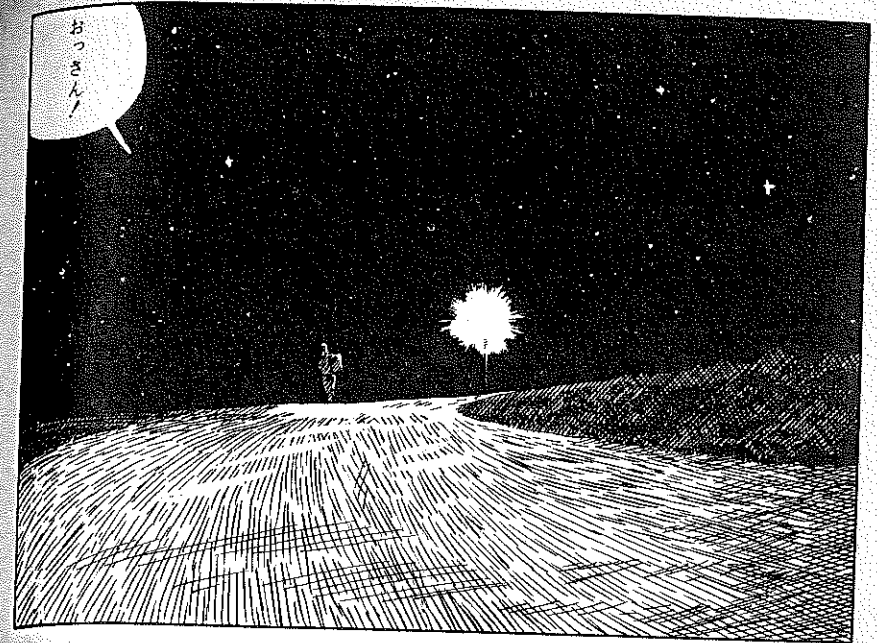
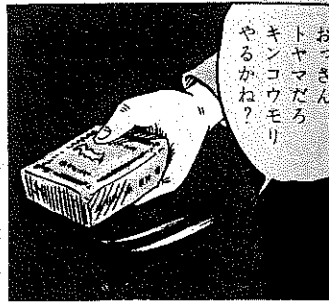
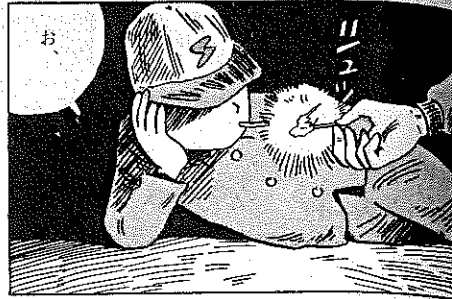
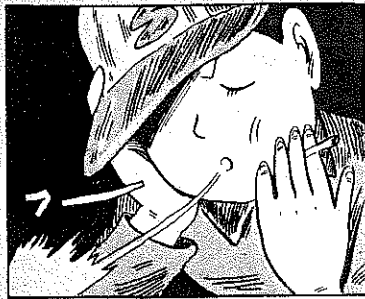


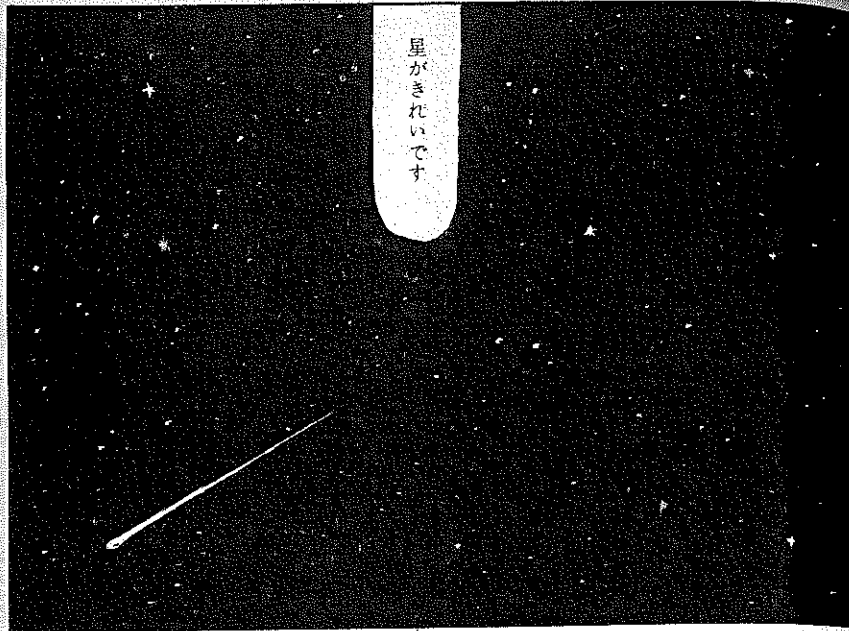
うめ

どうして
私の目は
こんなに細
いの!!
あまりといえ
ば
あんまりな

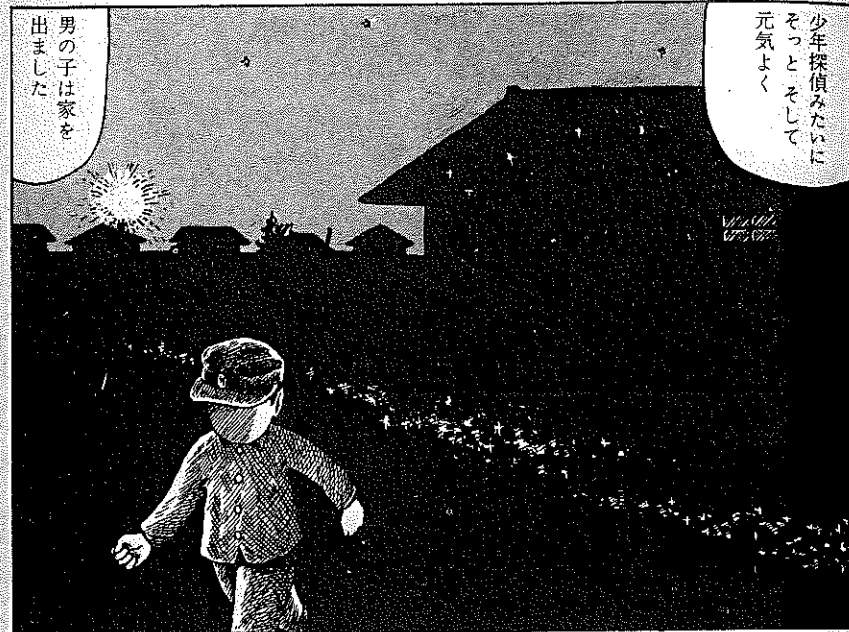


六の宮姫





星がきれいです



男の子は家を出ました

少年探偵みたいに
そっとそして
元気よく

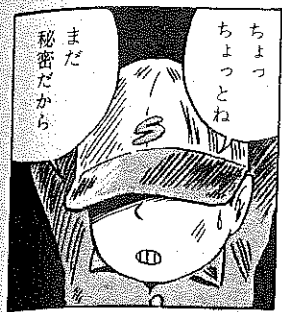


では
チンピラの
あにい：



オレはもう
不良なんだ
ぜ

それが
なんでい！



まだ
秘密だから

ちよっ
ちよっ
ちよっ
とね



恋人も……
いったい
なんて名前
だろうか？

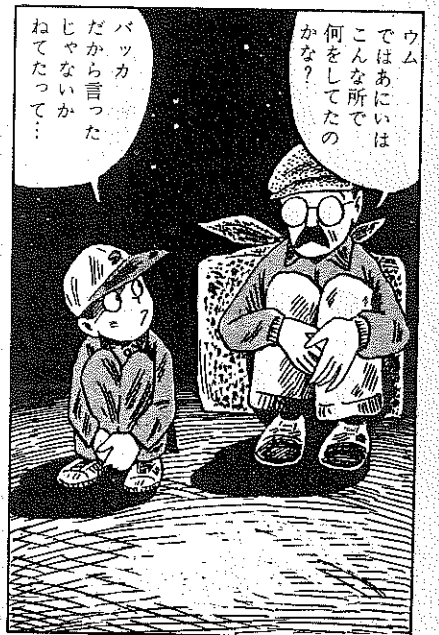
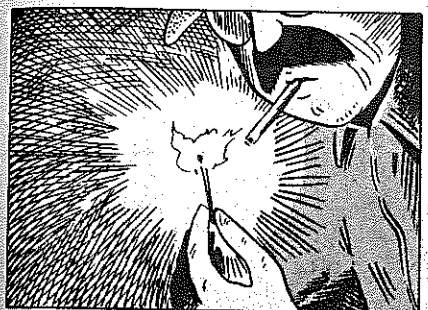


まあな
恋人だっても
いる



しからば
わしも
ここで一服……

なるほど
しかり！



バック
だから言った
じゃないか
ねてたって！

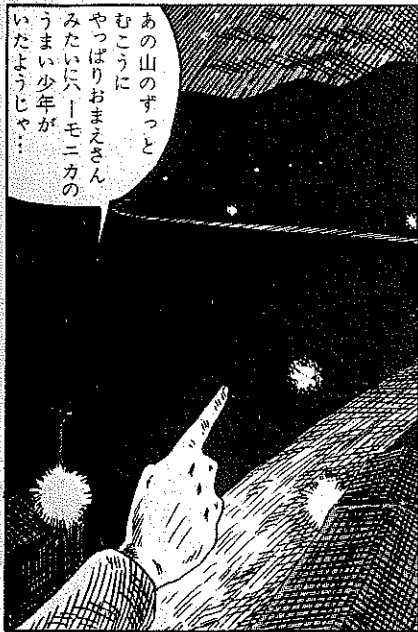
ウム
ではあにい
は
こんな所で
何をしてたの
かな？



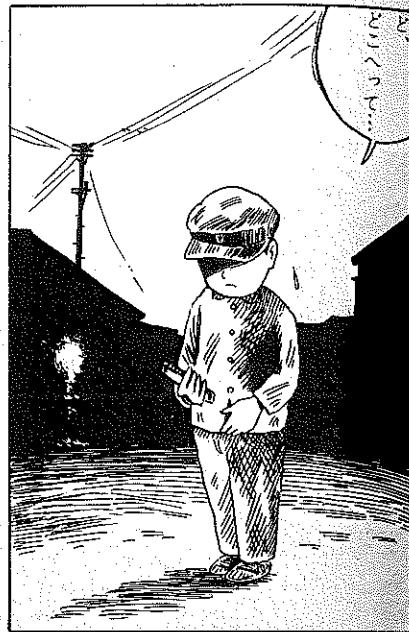
町はずれで
その声をかけた
のは、歳とった
旅の葉売り
でした



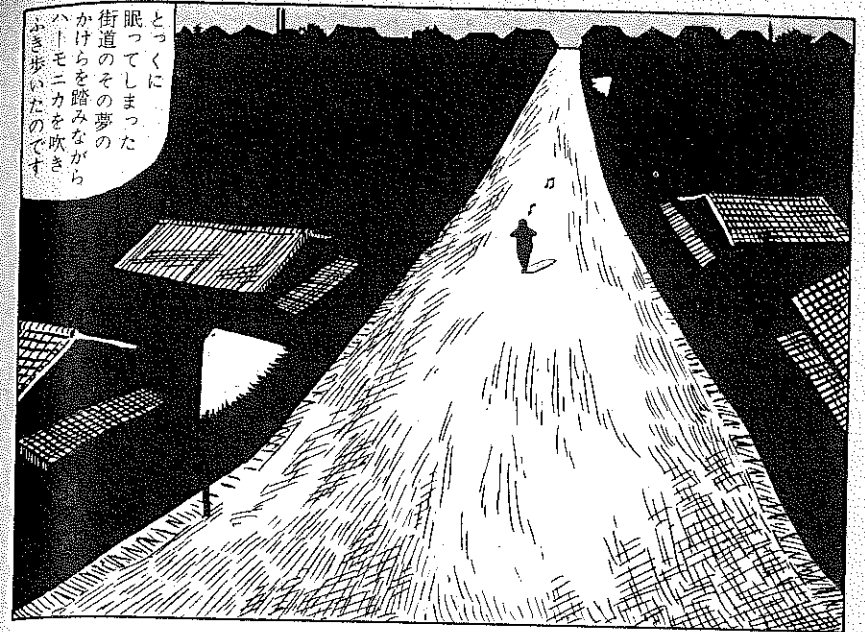
おまえさんは
どこへ
行くのかわね?



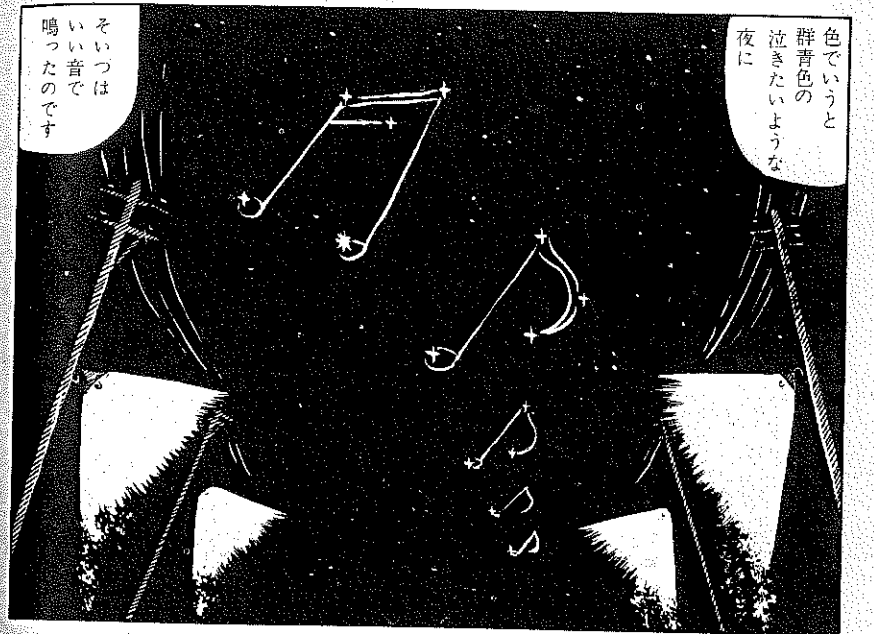
あの山のすつと
むこうに
やっばりおまえさん
みたいだーモニカ
のうまい少年が
いたようじゃ...



どこへって...

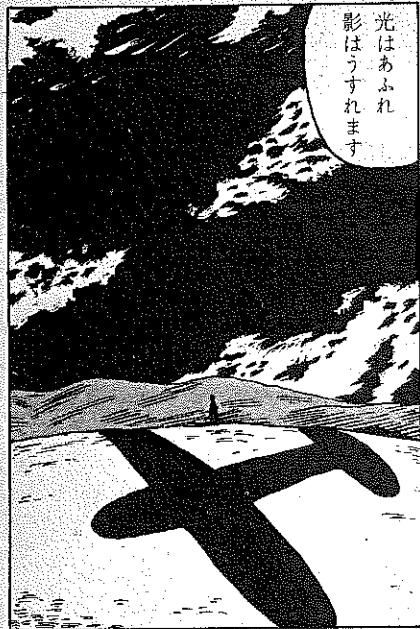


とつくに
眠ってしまった
街道のその夢の
かけらを踏みながら
ハトモニカを吹き
ふき歩いたので

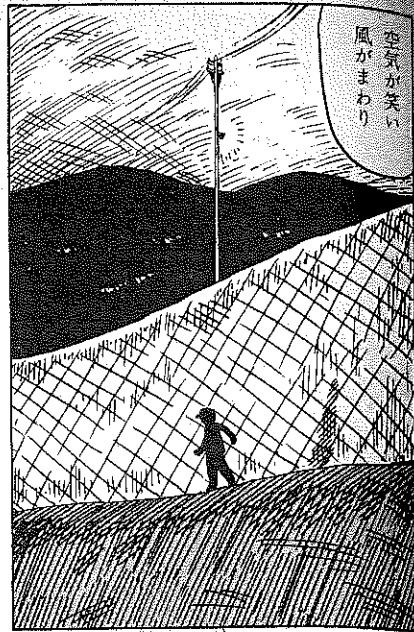


色でいうと
群青色の
泣きたいような
夜に

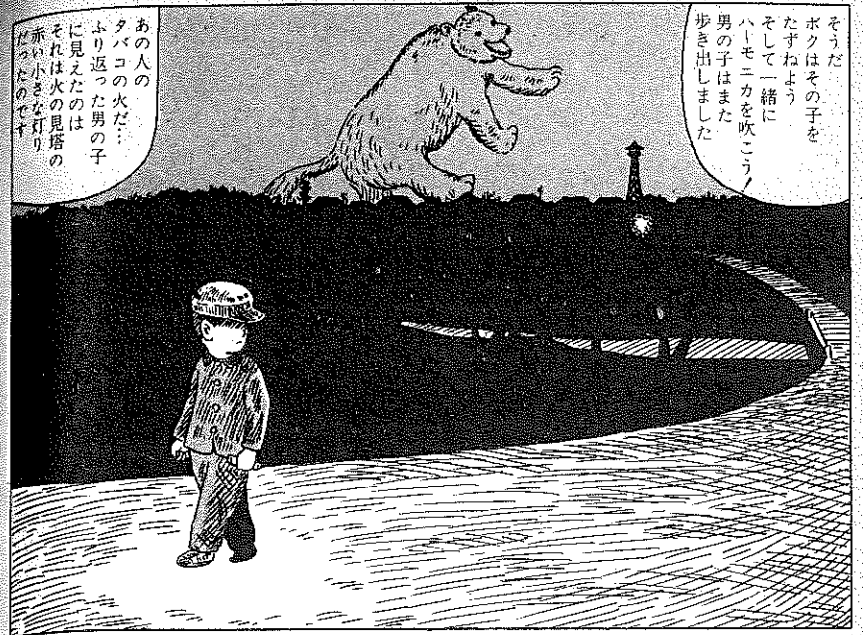
そいつは
いい音で
鳴ったのです



光はあふれ
影はうすれます

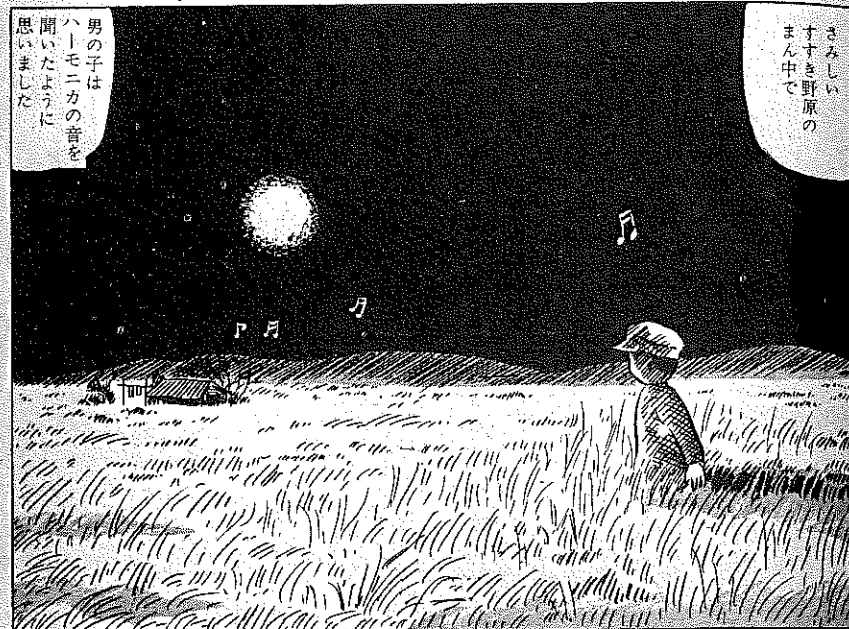


空気が笑い
風がまわり



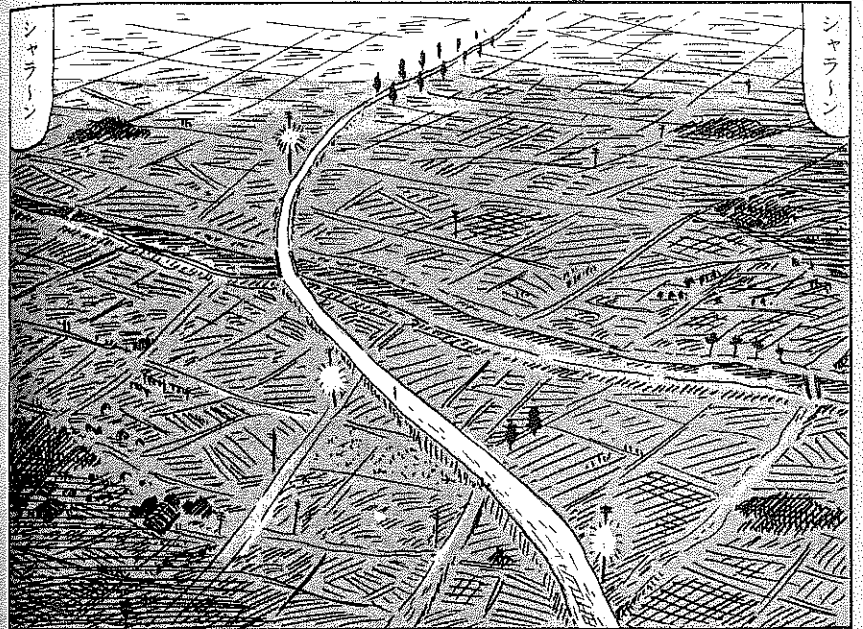
あの人の
タバコの火だ！
ふり返った男の子
に見えたのは
それは火の見塔の
赤い小さな灯り
だったのです

そうだ
ボクはその手を
たすねよう
そして一緒に
ハーモニカを吹こう
男の子はまた
歩き出しました



さみしい
すすき野原の
まん中で

男の子は
ハーモニカの音を
聞いたように
思いました



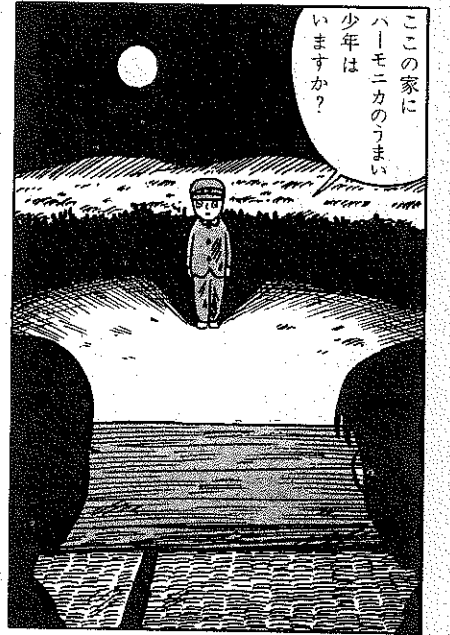
シャラリン

シャラリン



こんばんわ！

その文句を
口の中で何度も
練習したものの
男の子は
やはりふるえて
しまいます



この家に
ハーモニカのうまい
少年は
いますか？

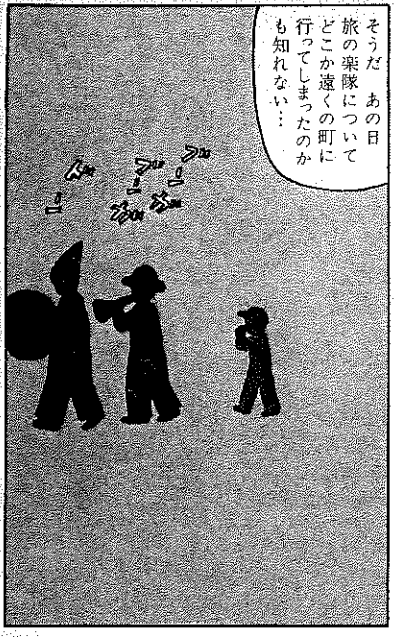


その家では
男と奥さんと
友だちとが
黄色い電燈の下
で酒をのみ
赤ん坊はスヤスヤ
と眠っていました

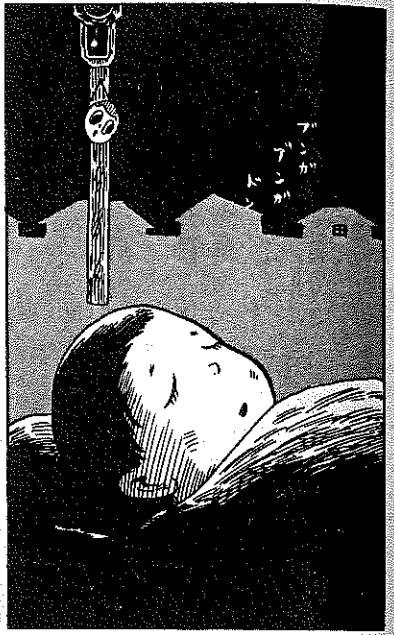


ああ
ずっと昔
そんな少年
がいたような
気がする……

心の底で
男はふと
考えます



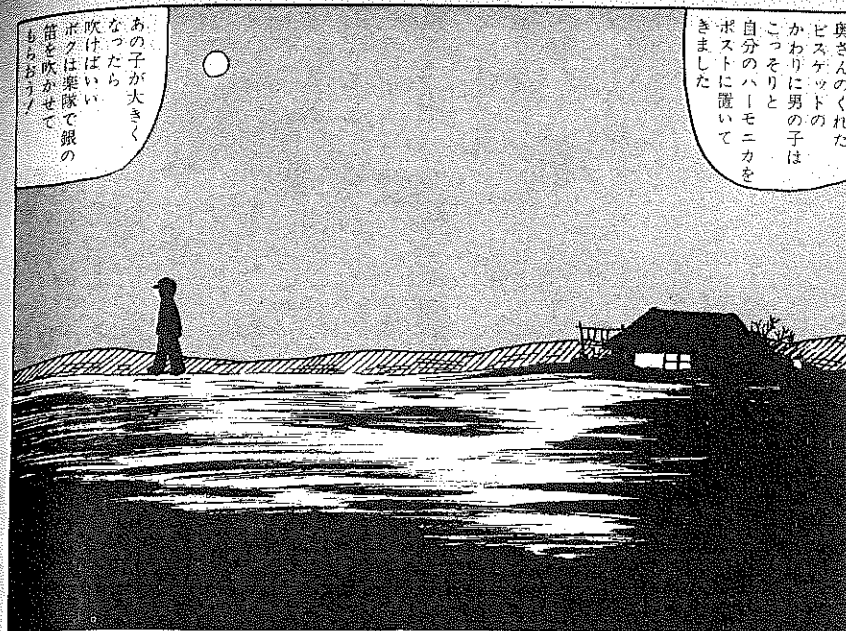
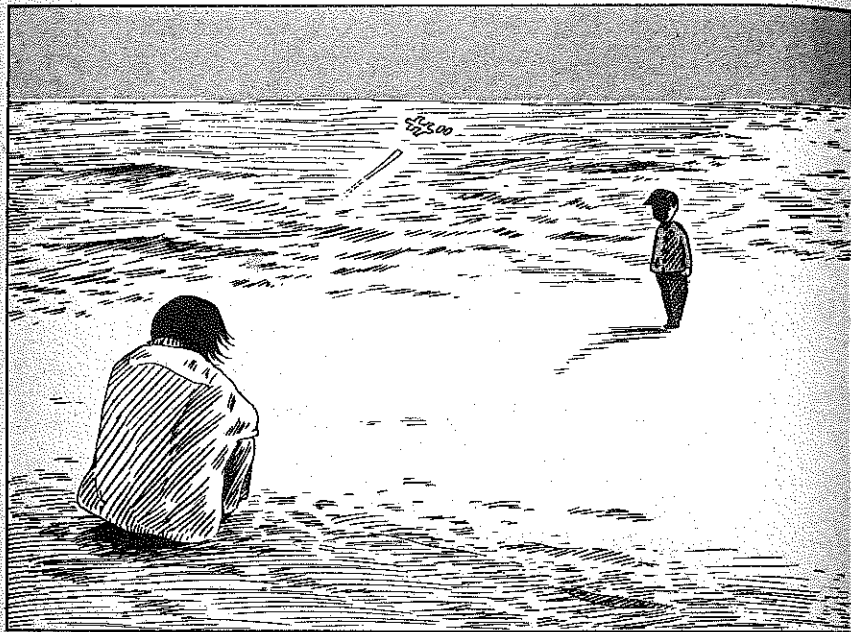
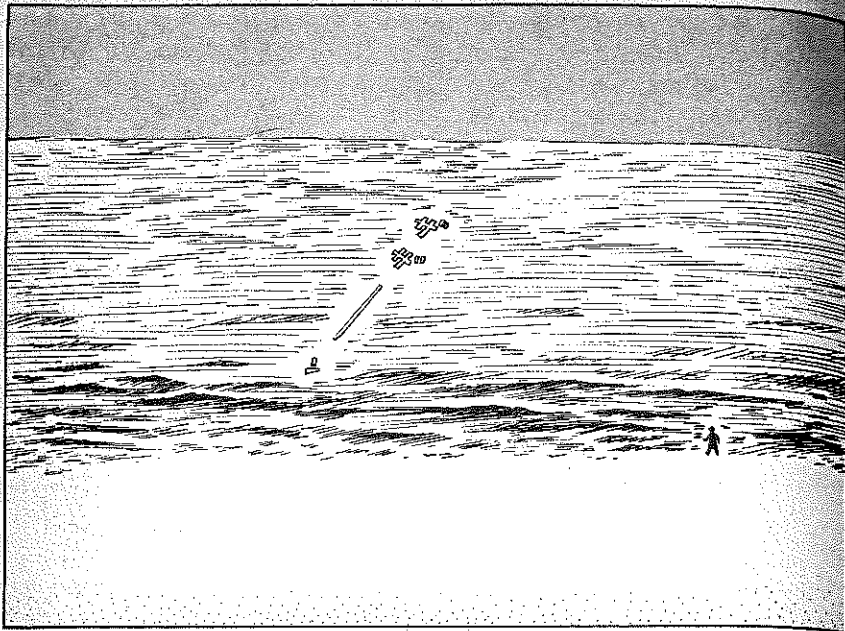
そうだ あの日
旅の楽隊について
どこか遠くの町に
行ってしまったのか
も知れない……



これをもちて
行きなさい
な



ありがとう

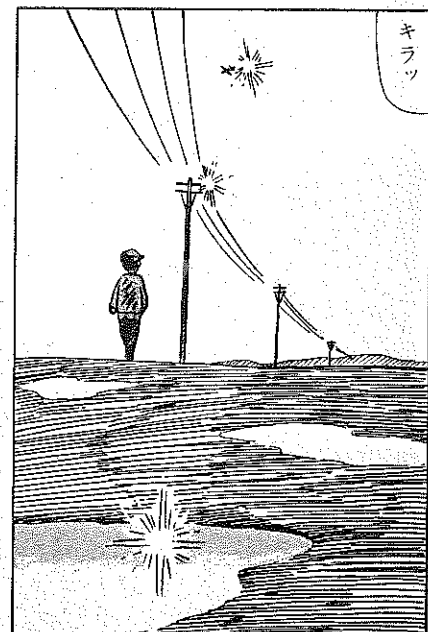


あの子が大きく
吹けばいい
ボクは楽隊で銀の
笛を吹かせて
もらおう

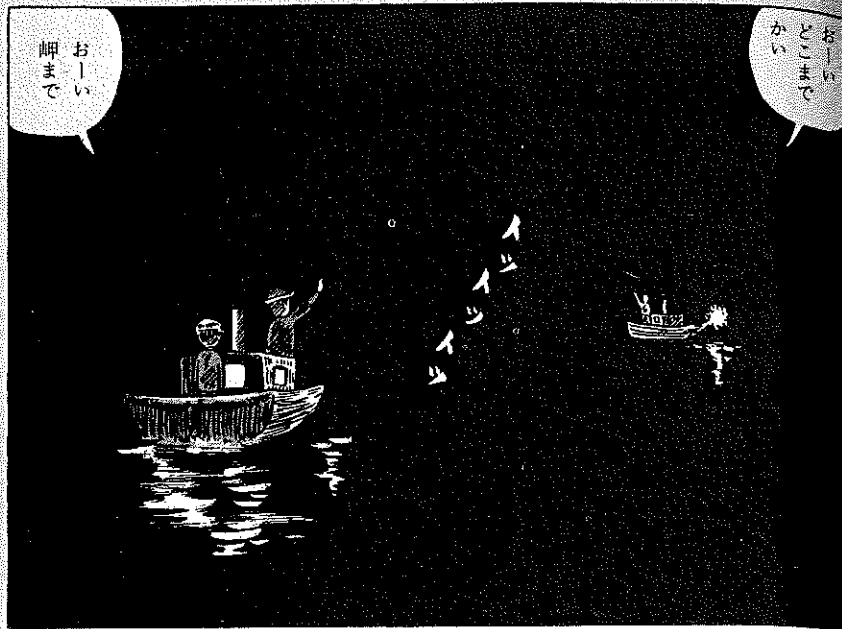
奥さんのくれた
ピステットの
かわりに男の子は
こっそりと
自分のハーモニカを
ボストに置いて
きました



キラ



キラッ



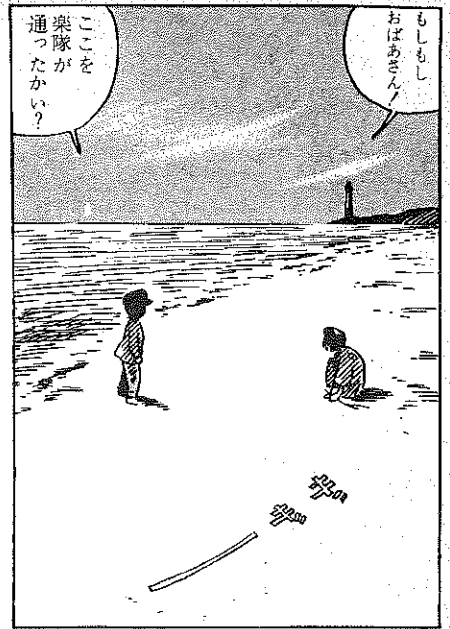
おーい
岬まで

おーい
どこまで
かい



さようなら

おーい
おーい
気をつけて



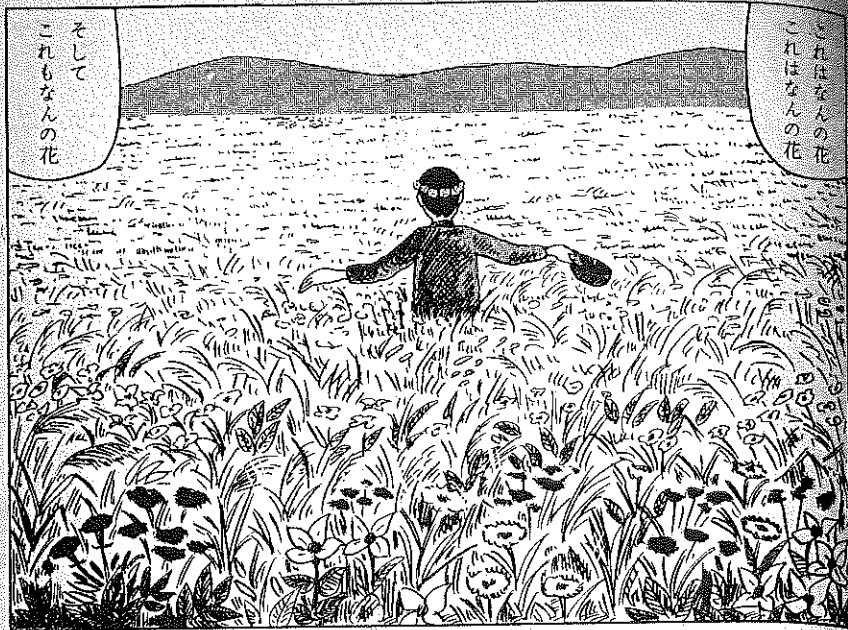
ここを
楽隊が
通ったかい？

もしもし
おばあさん？



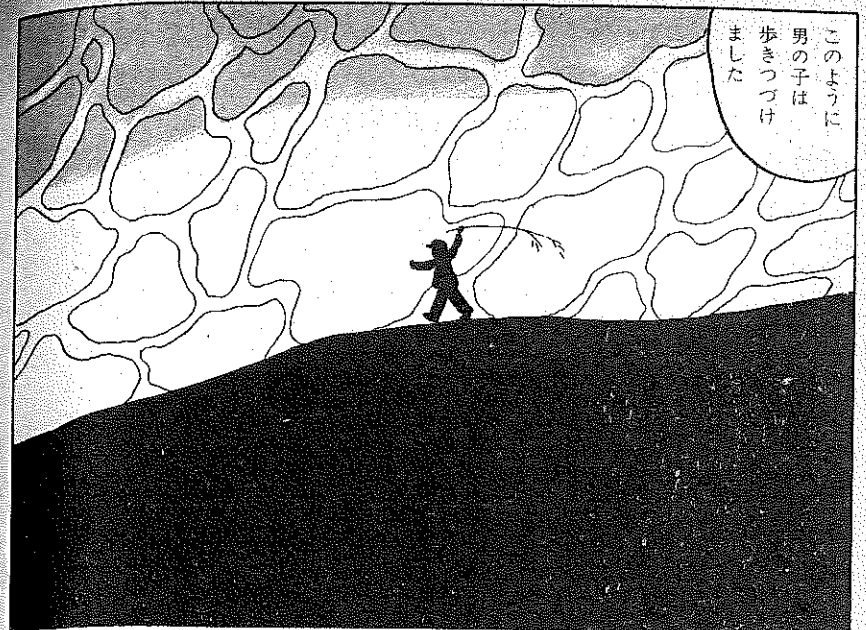
……ガク……
……タ……イ……



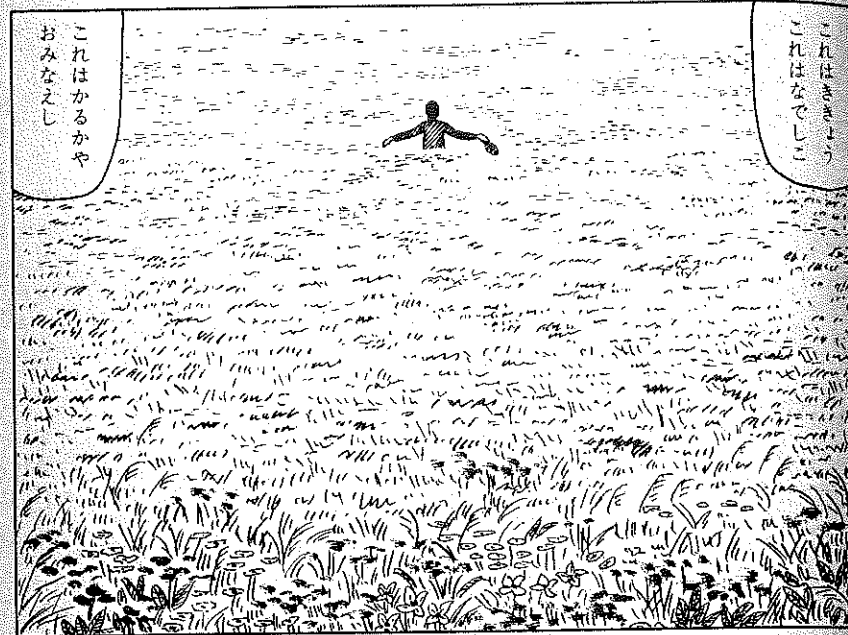


そして
これもなんの花

これはなんの花
これはなんの花

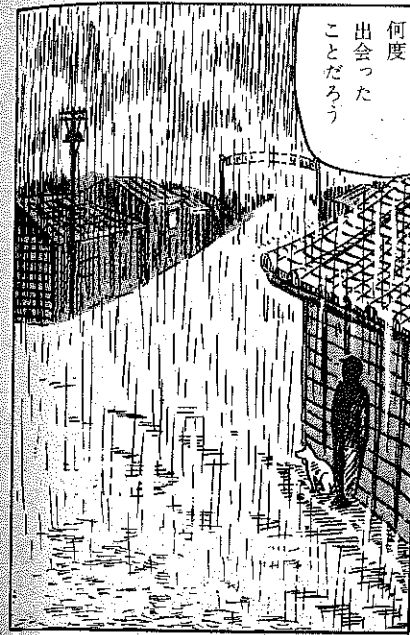


このように
男の子は
歩きつづけ
ました

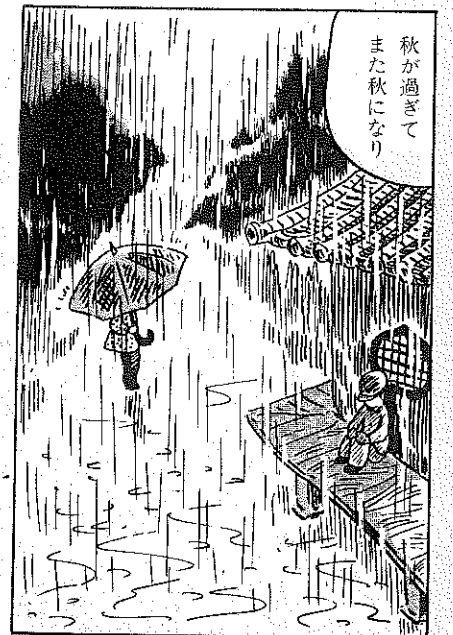


これはかるかや
おみなえし

これはきまじょう
これはなでしこ



何度
出会った
ことだろう



秋が過ぎて
また秋になり



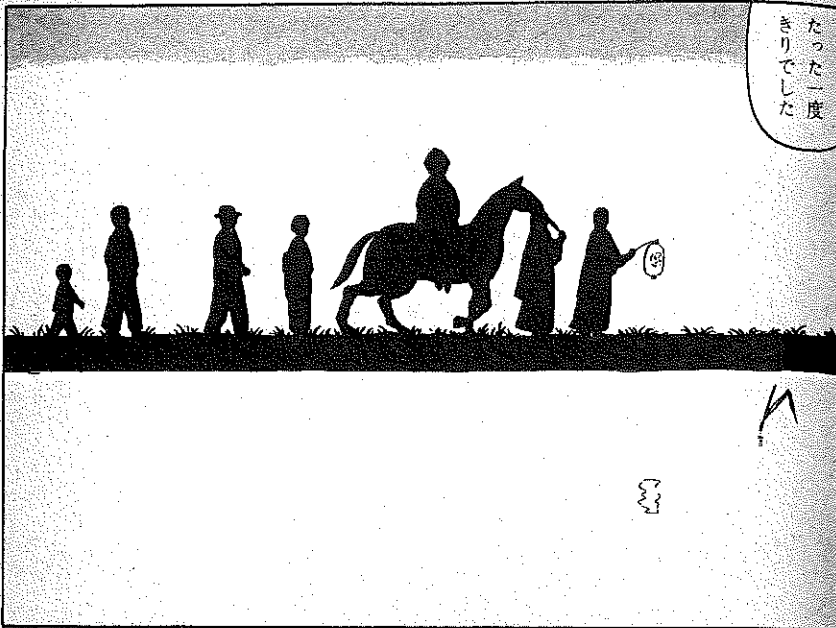
男の子が少女と話したのは



三年半のあいだに



連山に抱かれた小さな町では男の子は三年半暮しました



たった一度きりでした

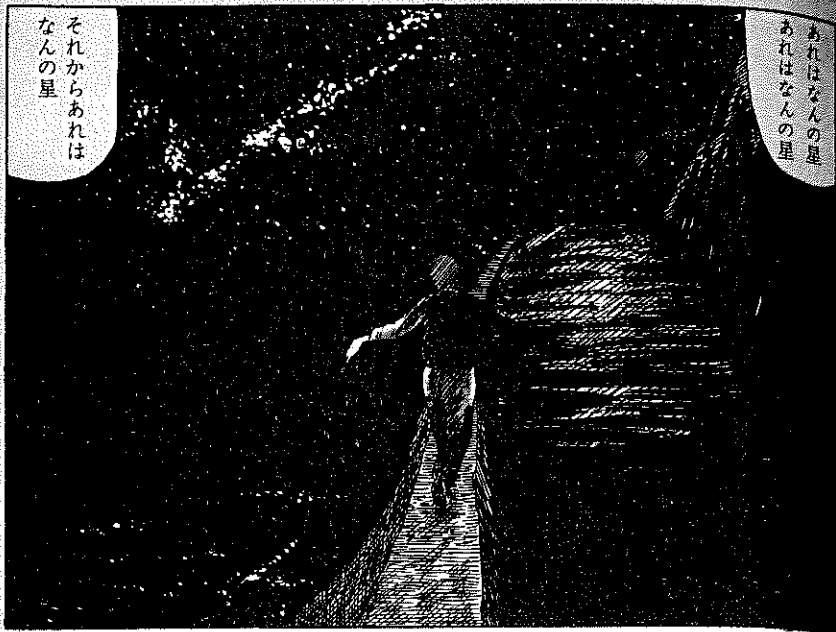


柿そうにマツチをする少女の手つきがおかしくてとても気に入ってしまったからでしたあんなに長いゆびのくせに……



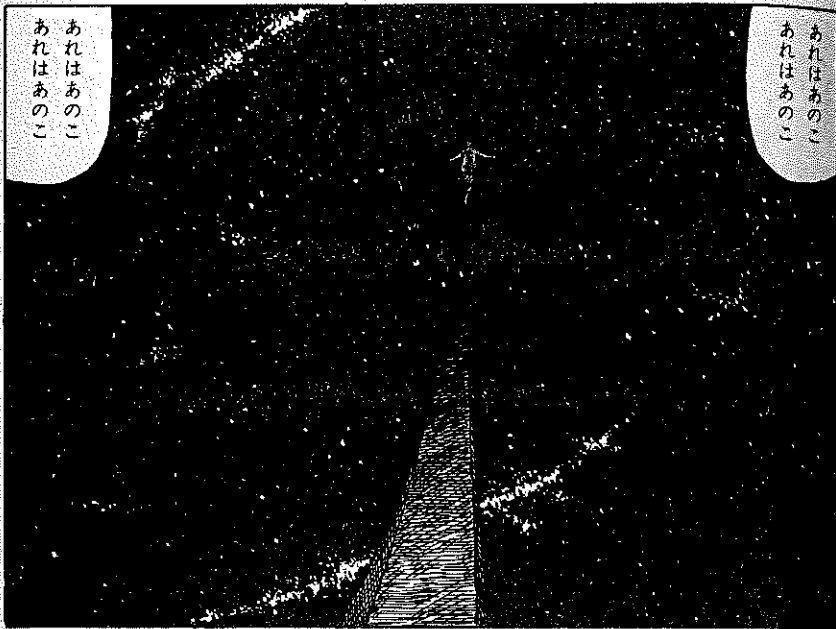
それは

あ……



それからあれは
なんの星

あれはなんの星
あれはなんの星



あれはあのこ
あれはあのこ

あれはあのこ
あれはあのこ



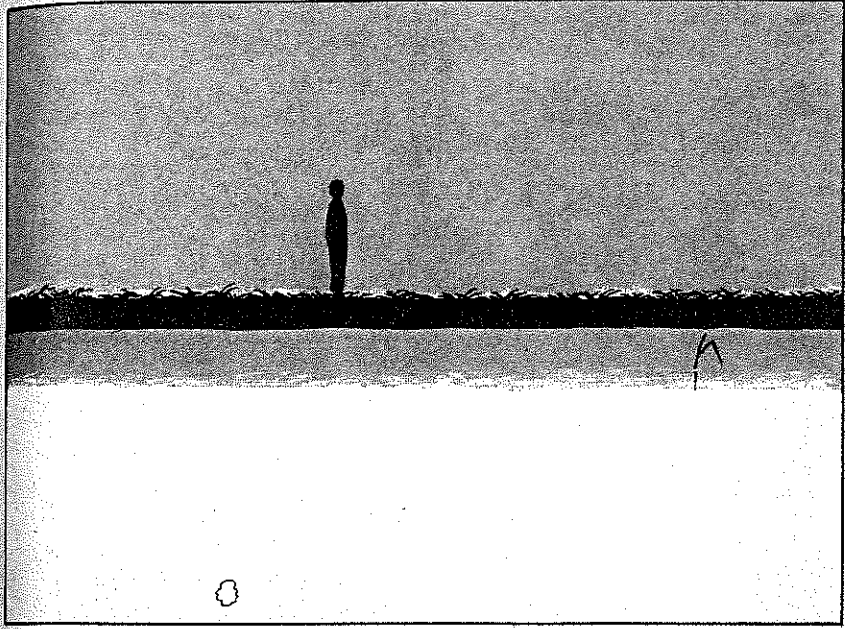
どうぞ

はいー



あの…

柿をとらせて
ください





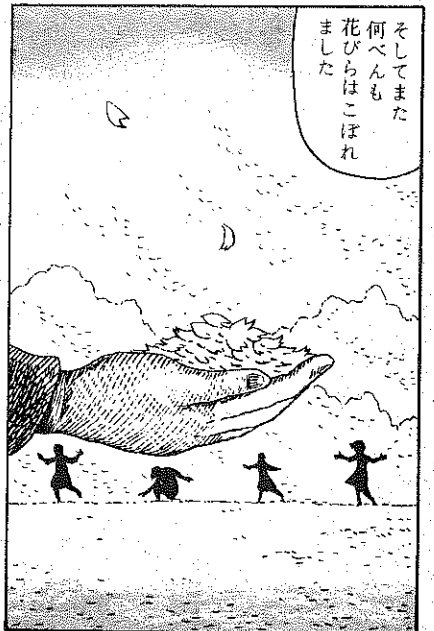
ドーン



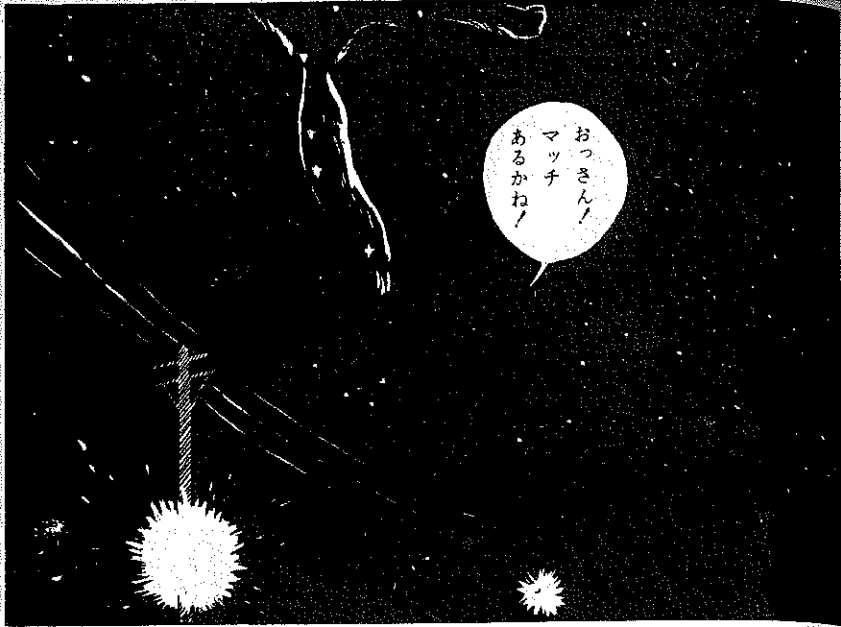
何べんも
何べんも
雪はふりました



何べんも
何べんも
星がながれ
ました



そしてまた
何べんも
花びらはこぼれ
ました



おっさん！
マツチ
あるかね！



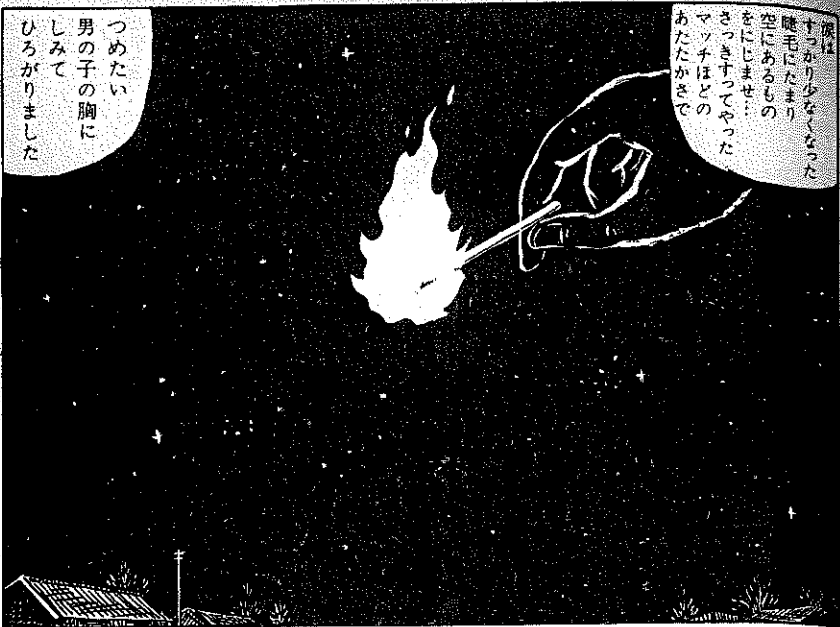
シュツ！
男の顔が赤く
かがやき
すぐにまた
かくれます



町の入口で
そう言つて
男の子を呼びとめ
たのは、若い
薬売りでした







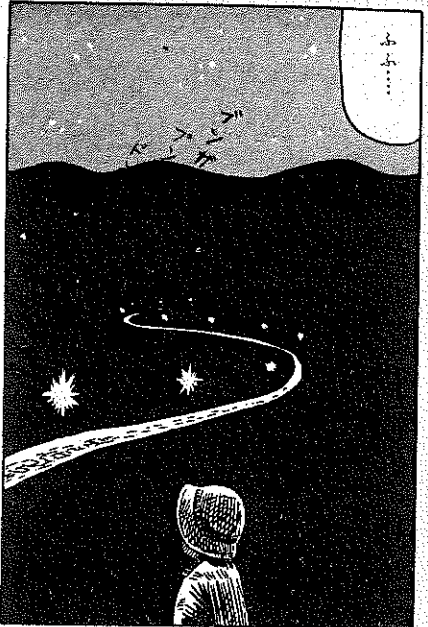
つめたい
男の子の胸に
しみて
ひろがりました

隙は
すつかり少なくなった
壁にたまり
空にあるもの
をにじませ…
さつきすつとやった
マッチほどの
あたたかさで



おかしいなあ…

アング
アング
アング



ふふ…



一瞬
さっきの顔を
目の前に見たよ
うな気がしました

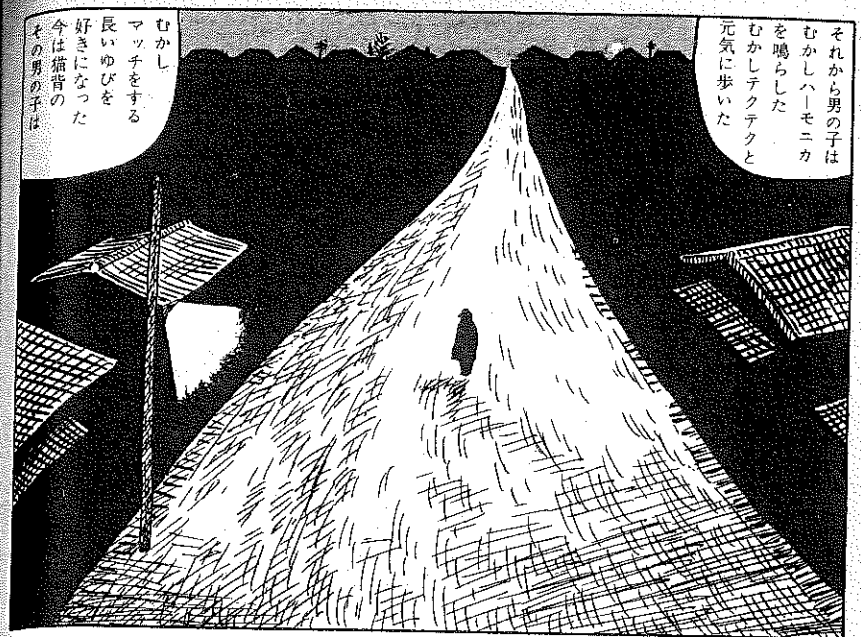


シューッ



じっと
耳をかたむけて
いるような

どこかにまだ
おきている子供が
いて…遠くの
送電線の音に…

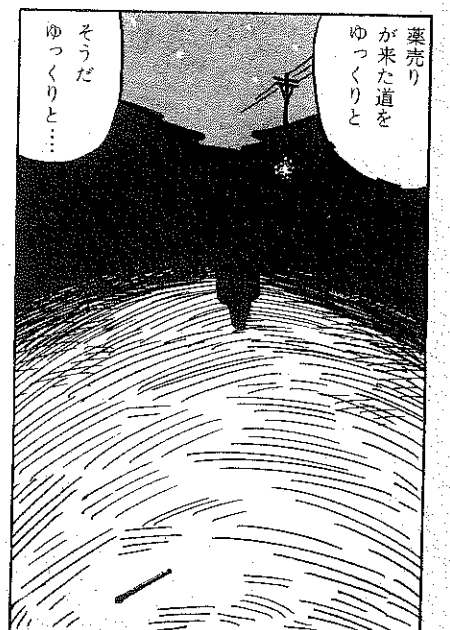


むかし
マッチをする
長いゆびを
好きになった
今は猫背の
その男の子は

それから男の子は
むかしハーモニカ
を鳴らした
むかしテクテクと
元気に歩いた



歩いて
いきました



そうだ
ゆっくりと...

薬売り
が来た道を
ゆっくりと



おっさん
今なんか
言ったか？



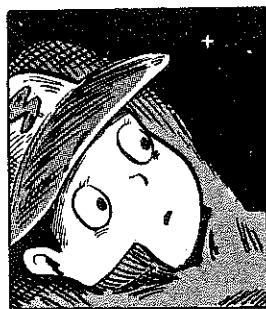
いや
別に...



星でも
見るのかね



さて
わしは
そろそろ
行くかな

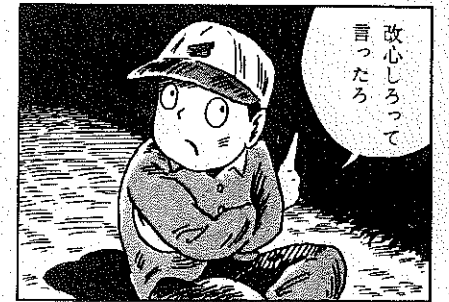


チョッ
そんなもん
見るかい！

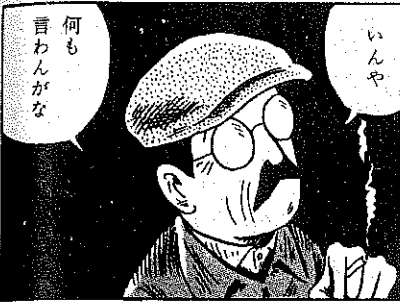


あんさんは
まだ恋人には
あいにゆかん
のかな？

うん
うん
まだな...

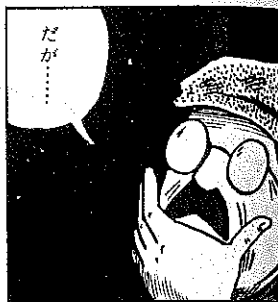


改心しろって
言ったらろ



何も
言わんがな

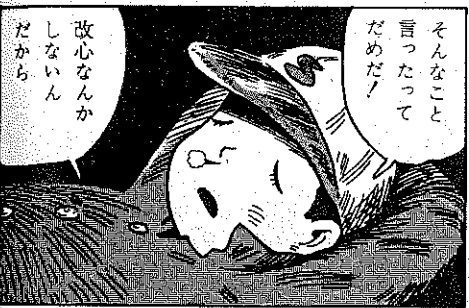
いんや



だが...



チョッ
やんなつち
まうなア



そんなこと
言ったらって
だめだ！

改心なんか
しないん
だから

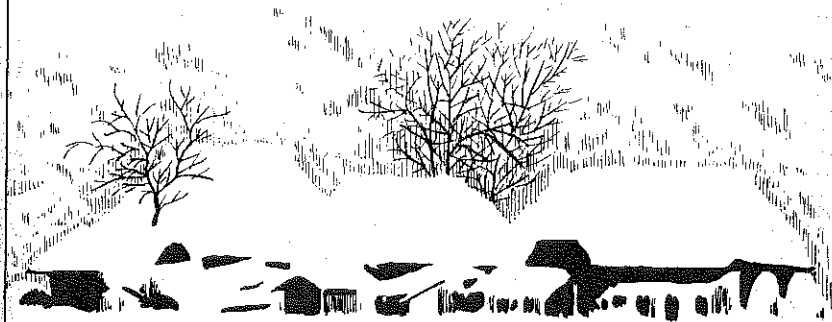


あんさんの
目ん玉...

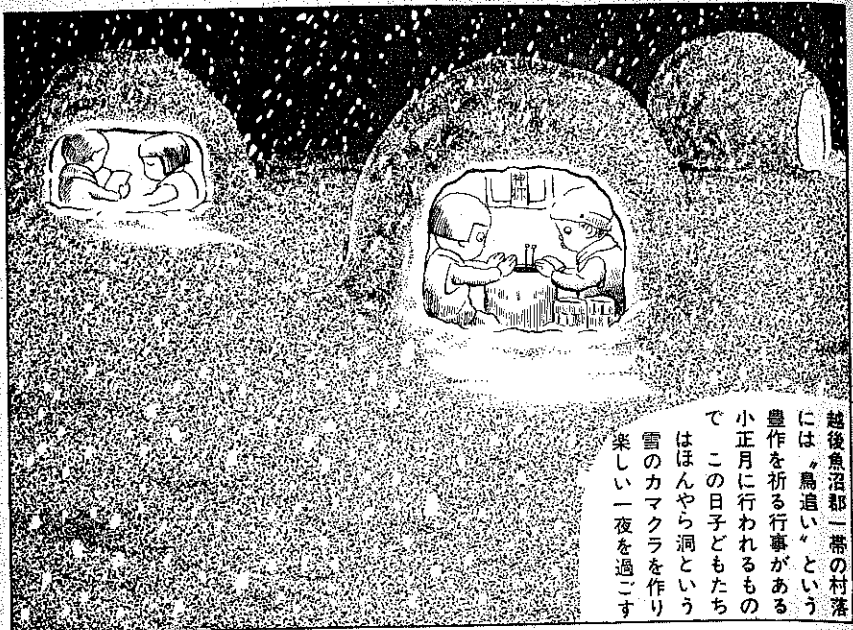


星が
ぎっしりだ

ほんやら洞の べんさん



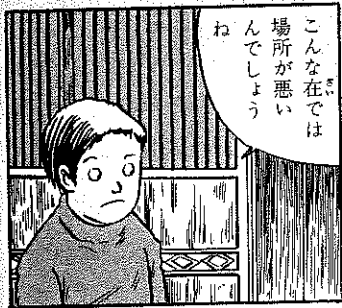
つげ義春



越後魚沼郡一帯の村産には、烏追い々という豊作を祈る行事がある小正月に行われるもので、この日子どもたちはほんやら洞という雪のカマクラを作り楽しい一夜を過ごす



町はずれにあるべんさんの宿は、べんさんが横着をして屋根の雪おろしをしないので、ほんやら洞のような格好になっていた



こんな在では場所が悪いんでしょ



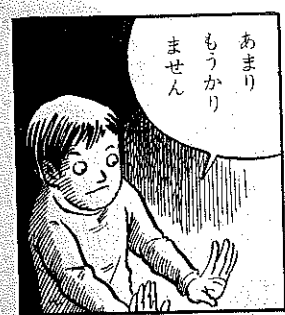
しかたがねえや昔からここにあってんだから



しかしおれは宿屋をやめたところでほかにどうするあてもないんだ



それでも昔は十日町明石チヂミや小千谷チヂミの行商人で結構繁昌したんだぜ



あまりもうかりません



ふ〜んマンガって商売はもうかるかね



ぼくはマンガを描いています



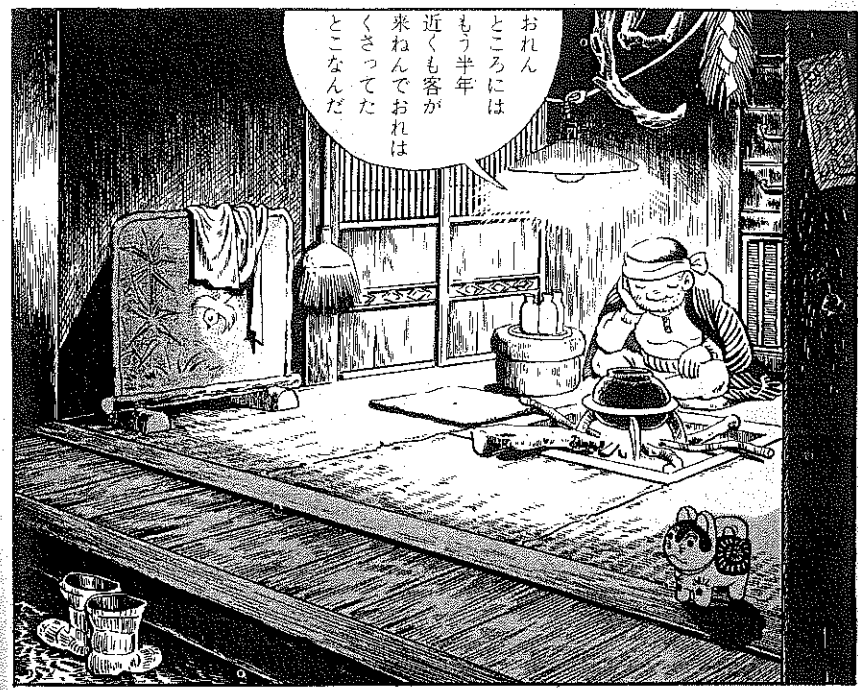
もしもし今晚は



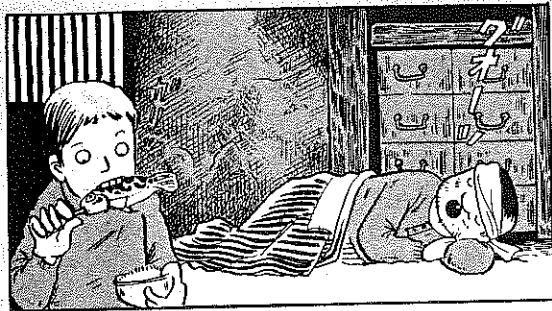
今夜泊めて下さいな



今晚は

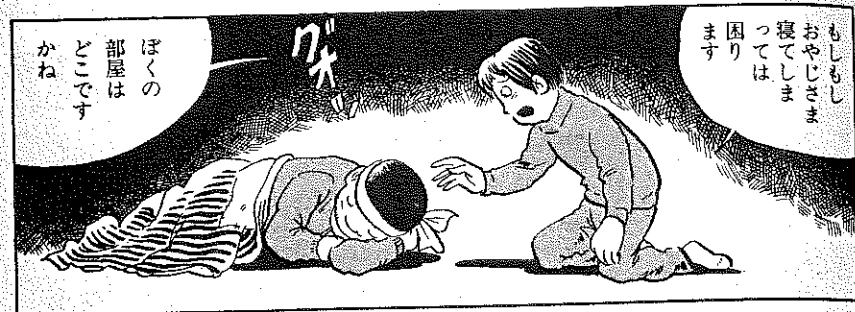


おれんところはもう半年近くも客が来ねんでおれはくさったとこなんだ



グオーッ

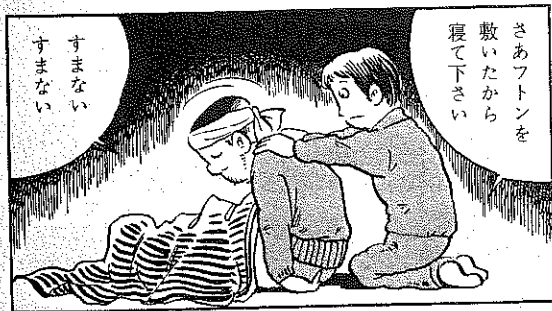
気味が悪かったら皮をむけば同じことさ



グオーッ

もしもしおやじさま寝てしまつては困ります

ぼくの部屋はどこですかね

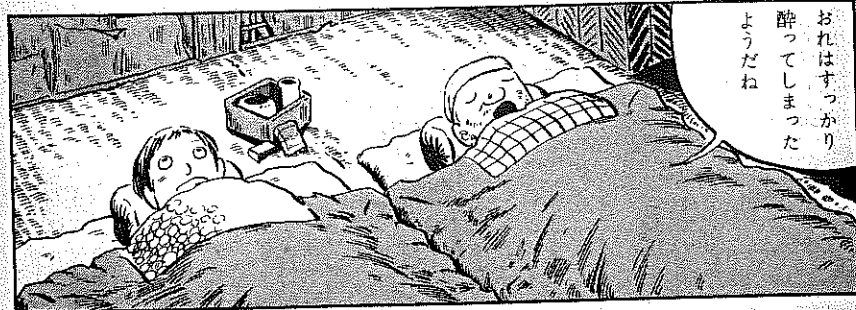


さあフトンを敷いたから寝て下さい

すまないすまない



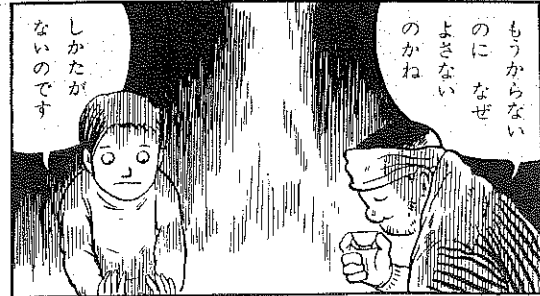
そこにフトンがあるよ



おれはすっかり酔ってしまったようだね



するとお前さまは不遇なんだね



もうからないのになぜよさないのかね

しかたがないのです



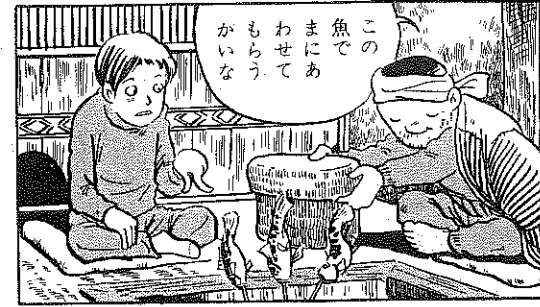
それは困つたのまさか客が来るとは思わなかつたからの



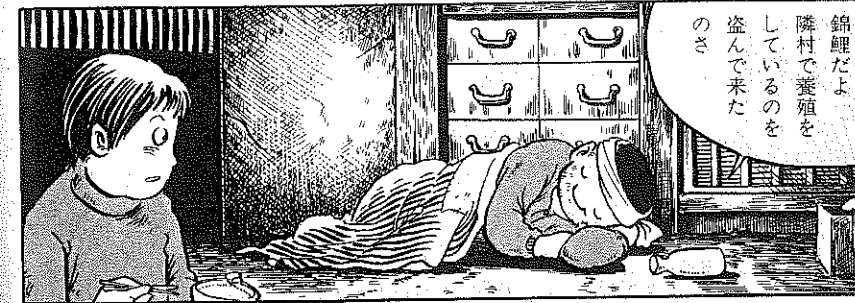
ところでぼくは夕食がまだなんですが



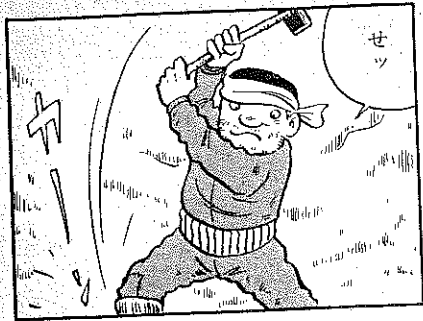
この赤いまだらは金魚ではないですか



この魚でまにあわせてもらうかいな



錦鯉だよ隣村で養殖をしているのを盗んで来たのさ

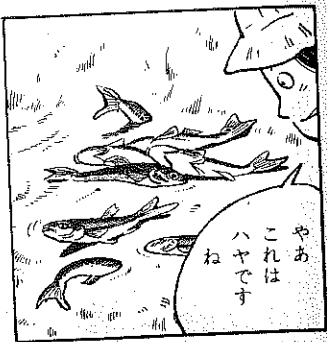


赤魚を
とっている
だよ



釣れない
のだよ

冬場は岩の下に
もぐってる
からな



やあ
これは
ハヤです
ね



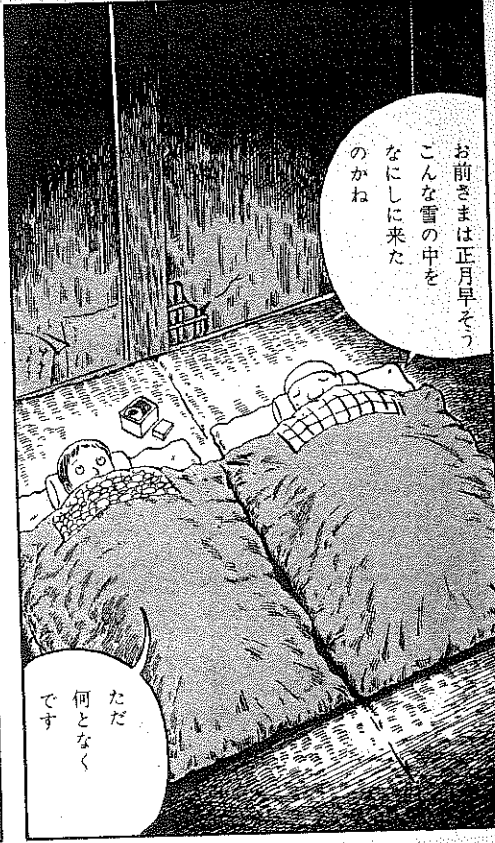
何となく
では
わからん
がな



お前さまは本当は
さびしいのでは
ないかね

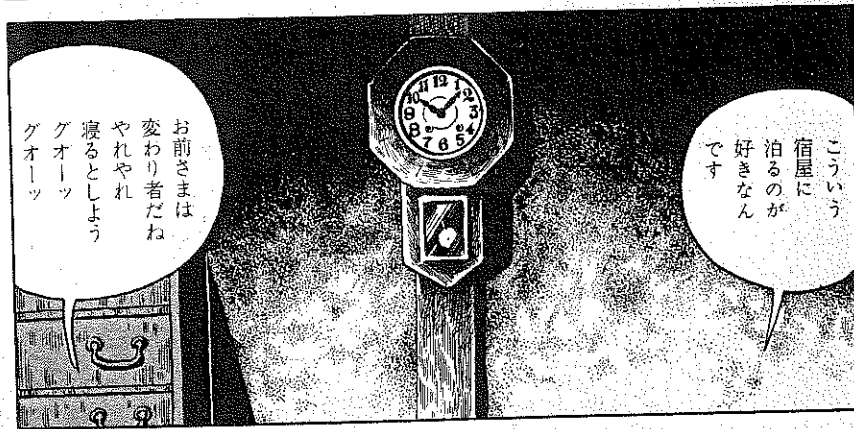


ぼくは
旅行が
好きなん
です



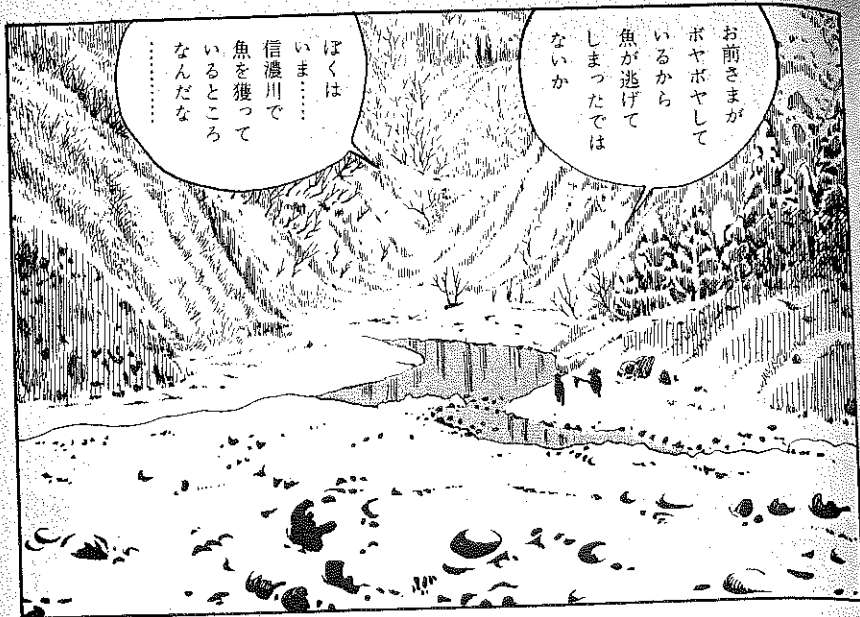
お前さまは正月早そう
こんな雪の中を
なにしに来た
のかね

ただ
何となく
です



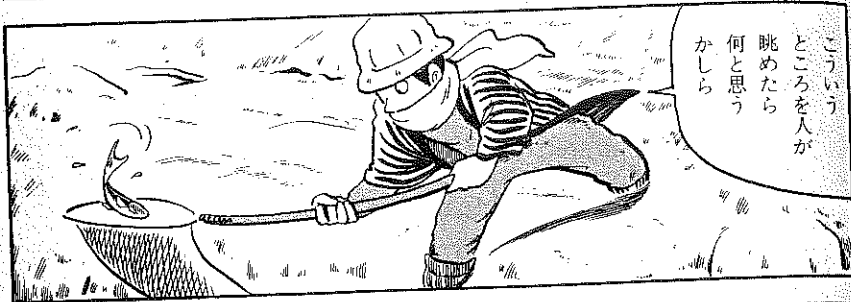
こういう
宿屋に
泊るのが
好きなん
です

お前さまは
変わり者だね
やれやれ
寝るとしよ
グオーツ
グオーツ

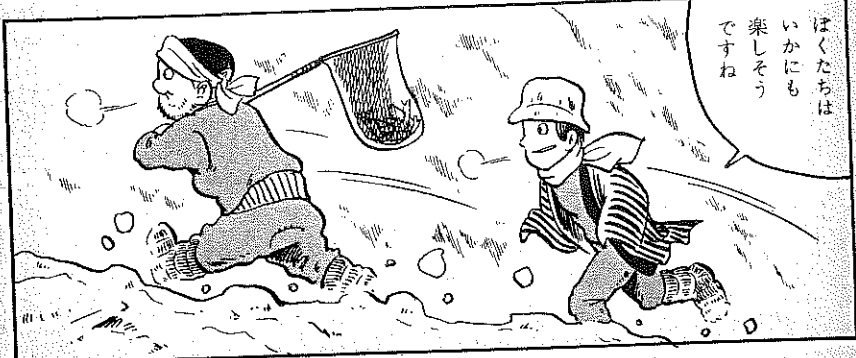


ぼくは
いま……
信濃川で
魚を獲って
いるところ
なんだな

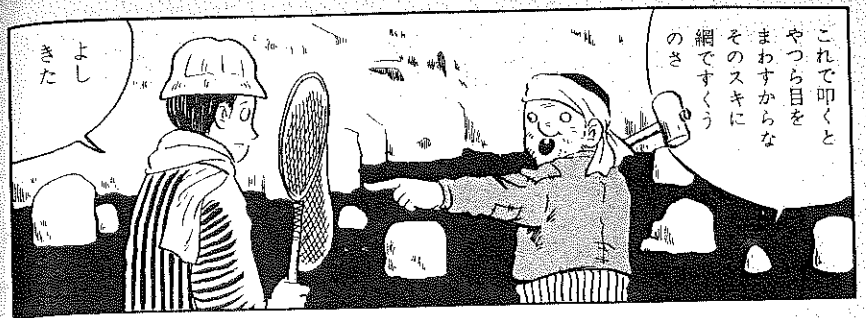
お前さまが
ボヤボヤして
いるから
魚が逃げて
しまったでは
ないか



ごついう
ところを人が
眺めたら
何と思っ
かしら

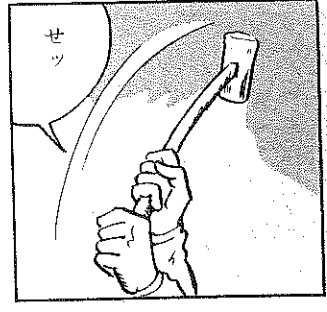
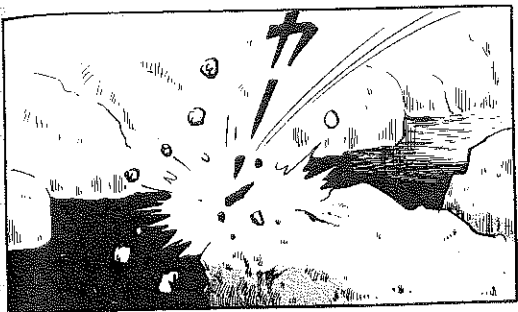


ぼくたちは
いかにも
楽しそう
ですね

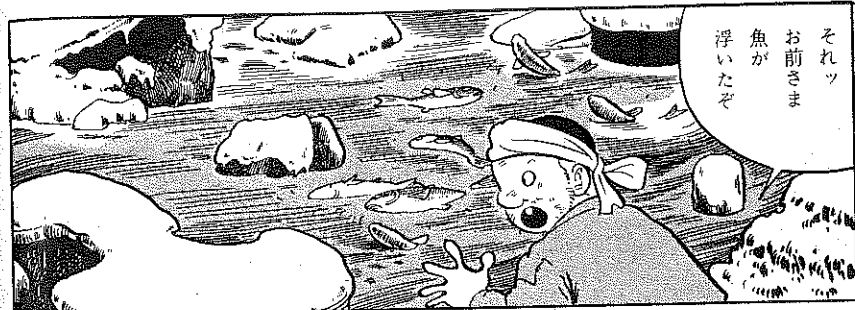


これで叩くと
やつら目を
まわすからな
そのスキに
網ですくう
のさ

よし
きた



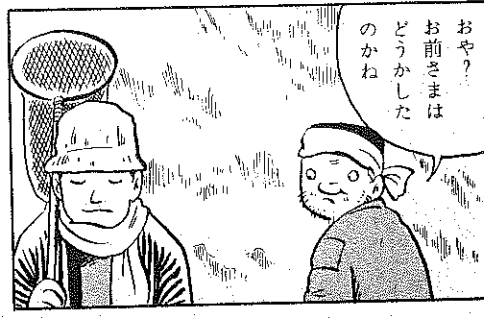
セッ



それッ
お前さま
魚が
浮いたぞ



なんだか
しみじみと
する音
ですね

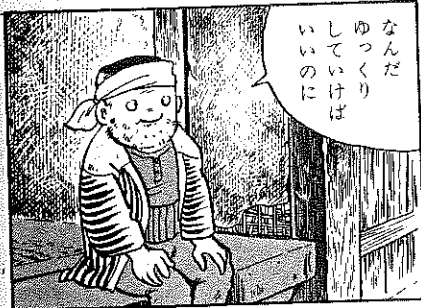


おや？
お前さまは
どうかした
のかね

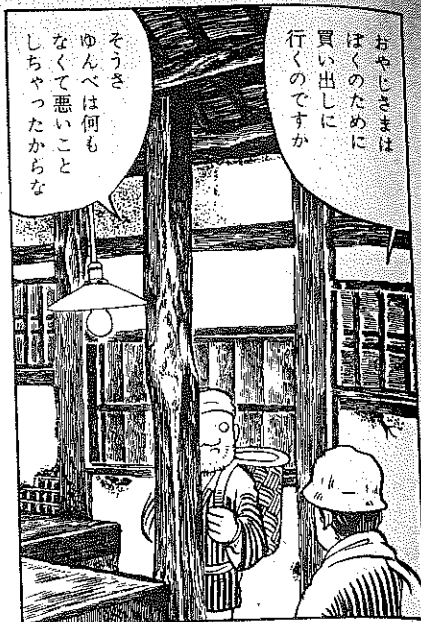
いい音
ですね



でも
ぼくは
すぐ帰り
ますけど



なんだ
ゆっくり
していけば
いいのに



おやじさまは
はくのために
買い出しに
行くのですか

そうさ
ゆんべは何も
なくて悪いこと
しちゃったからな



はくはゆっくり
したくとも
遊んでいられる
身分では
ないのです

それなら
ここで
仕事をしたら
どうだろう



でももし仕事
ができなかったら
ぼくは生活費を
相当使いこむ
ことになる
だろうね



旅の気分
にひたりながら
仕事をするのも
悪くないと
思うのが

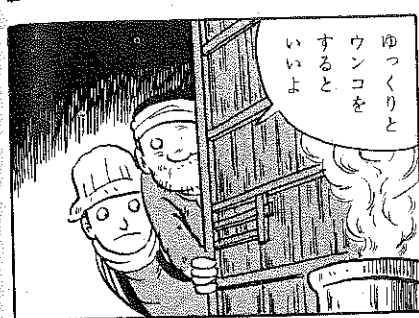


お前さまは
今朝は便所へ
行ったかね

まだ
です



さあ今夜はこれで
天ぶらにしようかな
それとも
塩焼きにしよう
かな



ゆっくりと
ウンコを
すると
いいよ



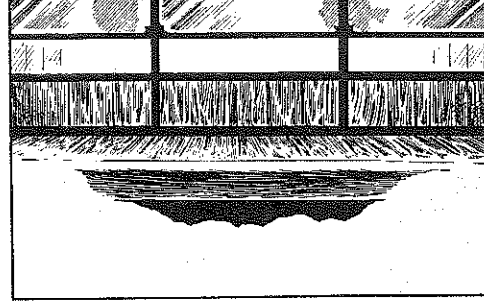
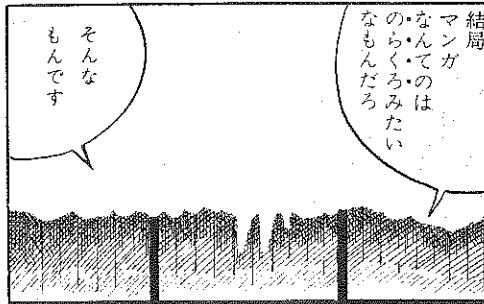
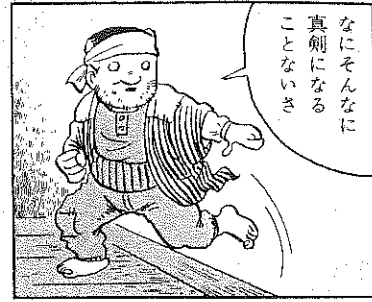
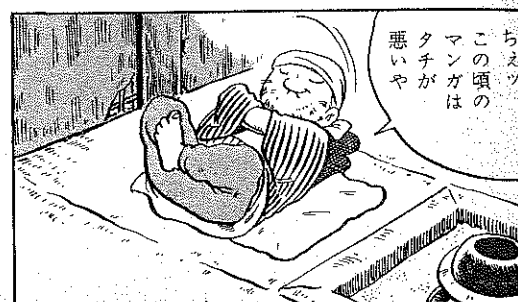
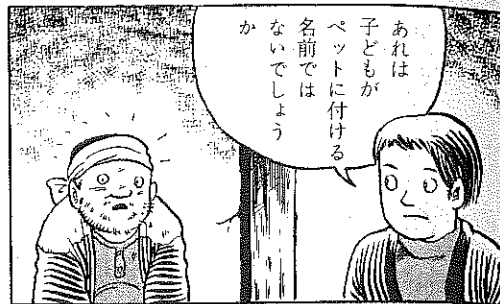
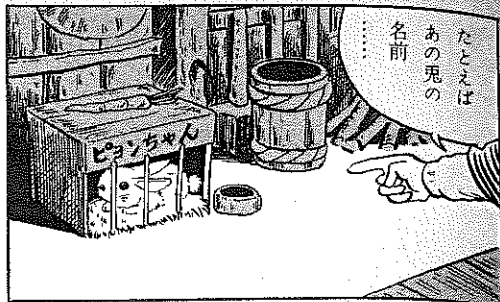
おれは
ほら
火鉢を
入れとい
たぜ

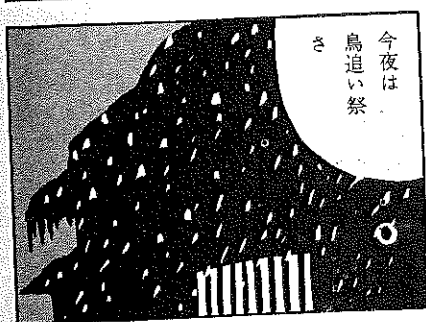
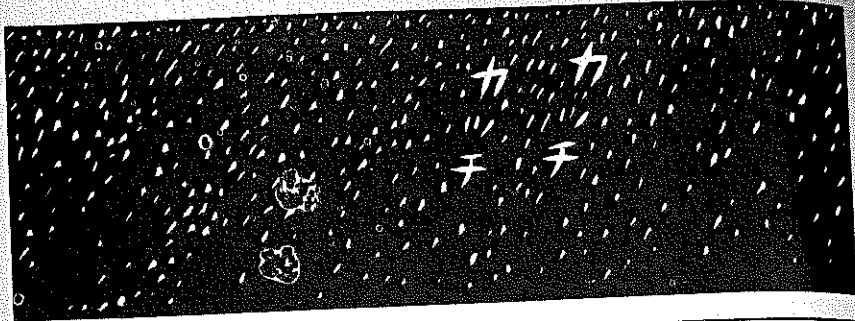


さあ
いそがしく
なつて
来たぞ



その間に
おれは町へ
買い出しに行つて
来よう

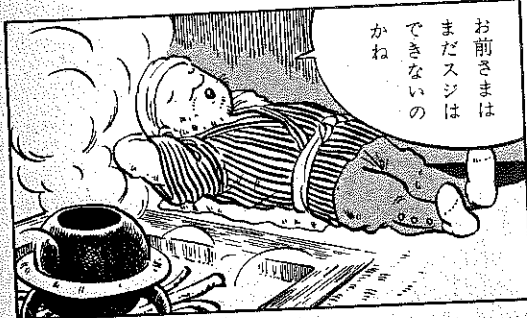
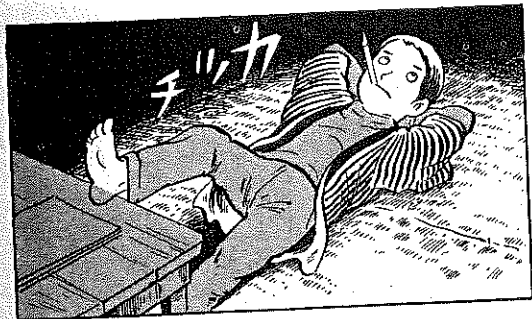




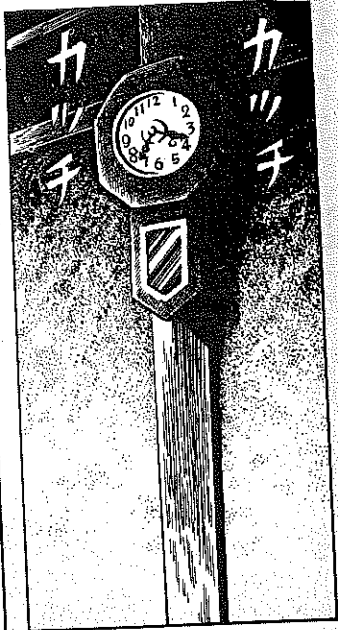
今夜は
鳥追い祭
さ



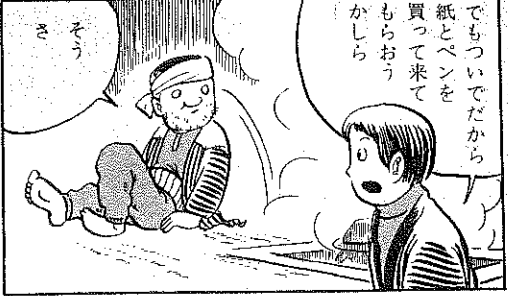
おやじさま
どこかで
ビョウシ木の
音がきこえる
ね



お前さまは
まだスジは
できないの
かね



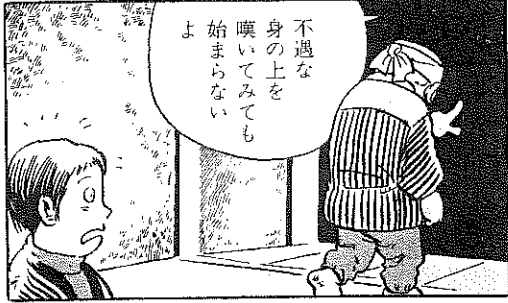
お前さまは
ここががんばら
なくちゃ
いけないよ



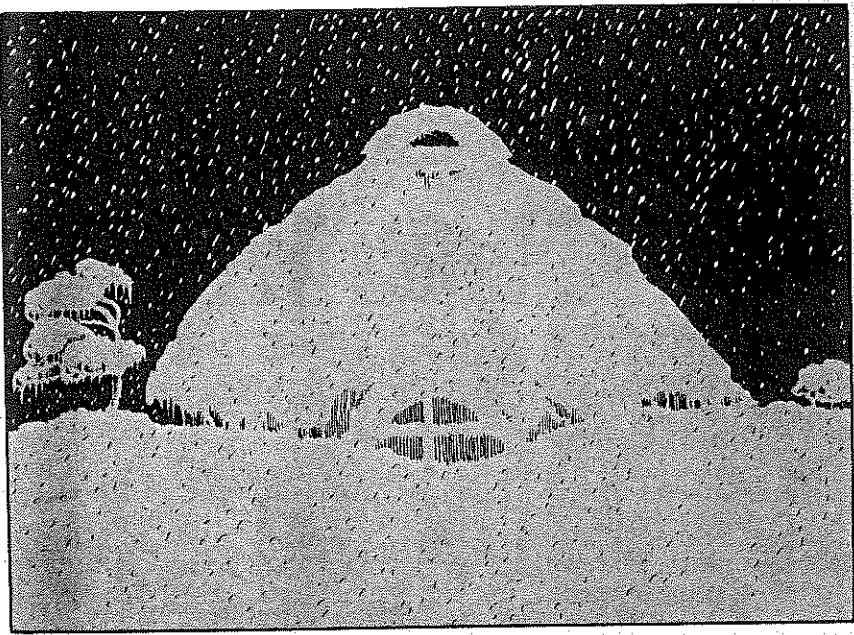
でもついでだから
紙とペンを
買って来て
もらおう
かしら



さーア
おれもが
んばるぞ

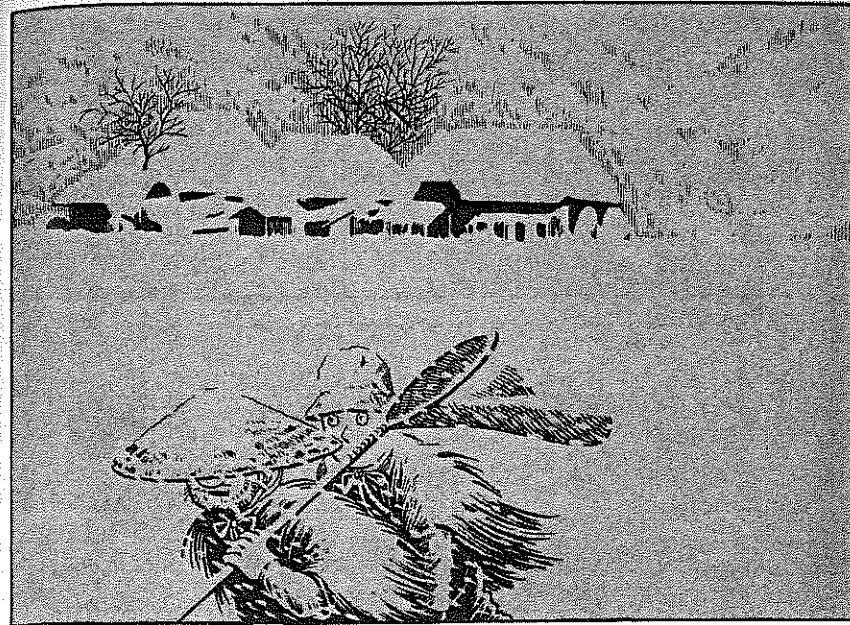


不遇な
身の上を
嘆いてみても
始まらない
よ





お前さまは
見張りを
たのむぜ



よーし今夜は
こいつを
盗んで
やろう



いよッ
金兜だ



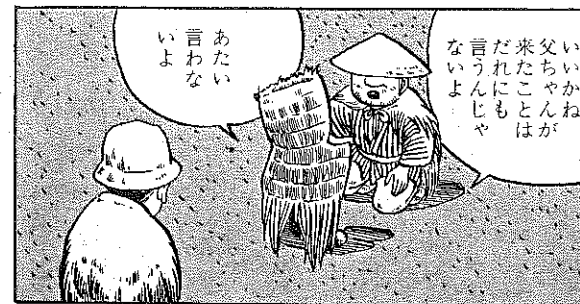
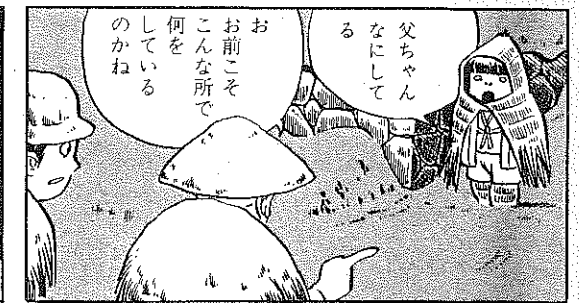
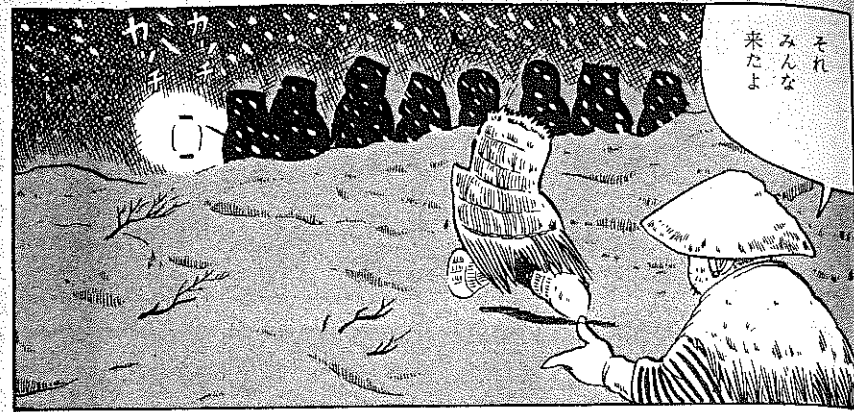
こいつは
輸出用で
一びき
十万円も
する
ヤツだ

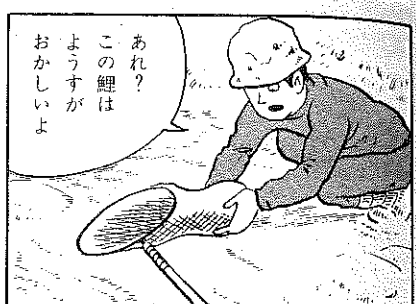
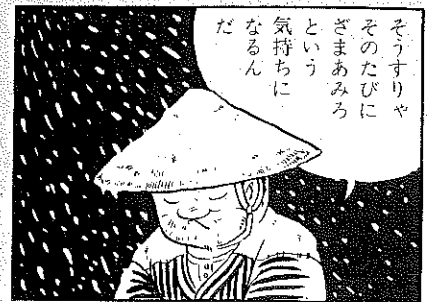
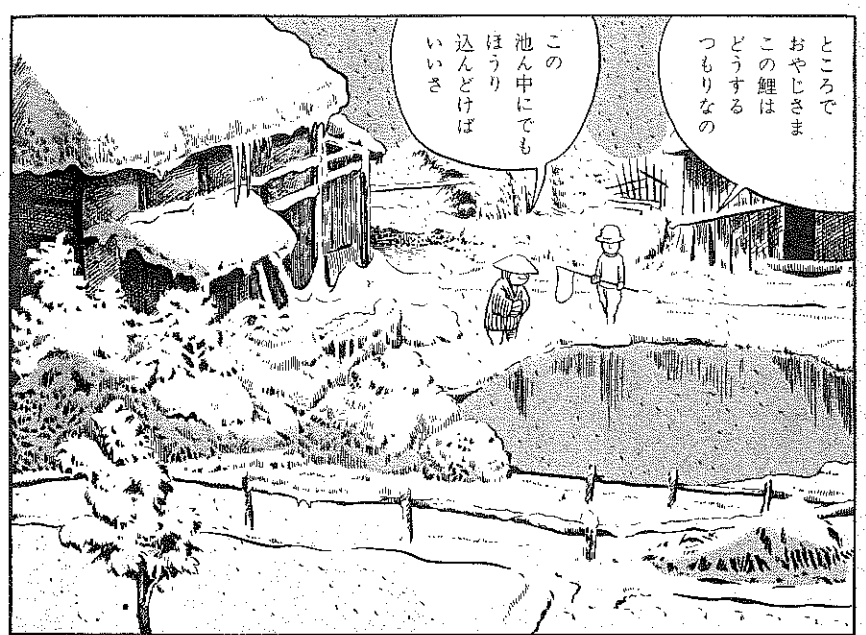


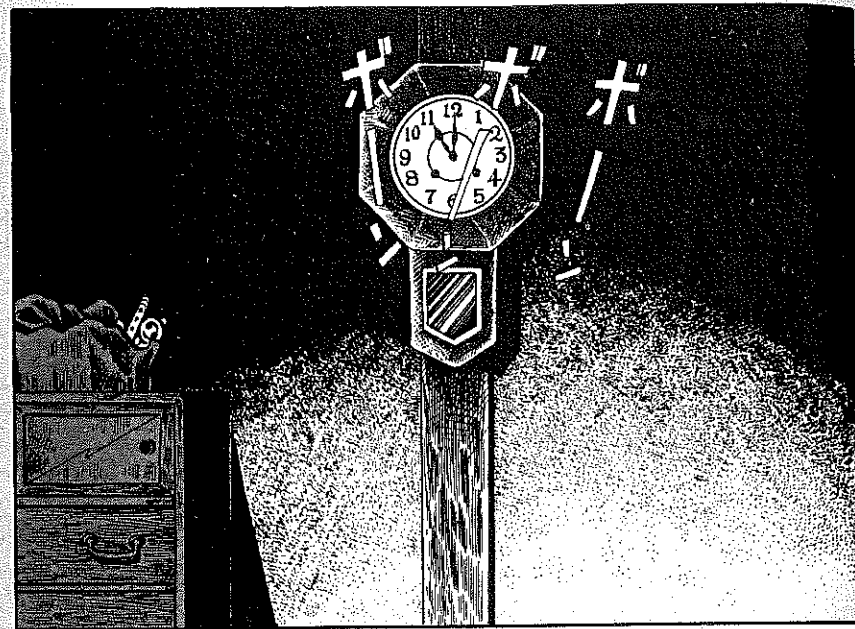
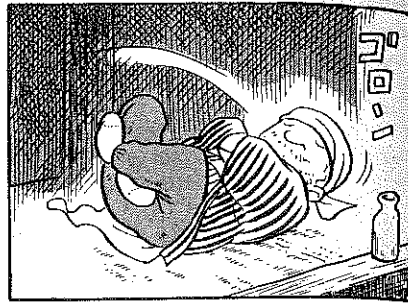
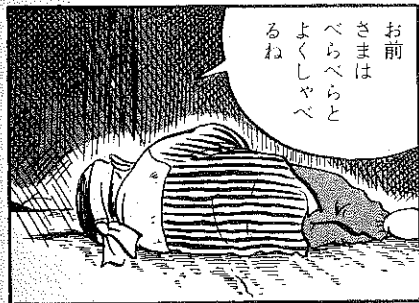
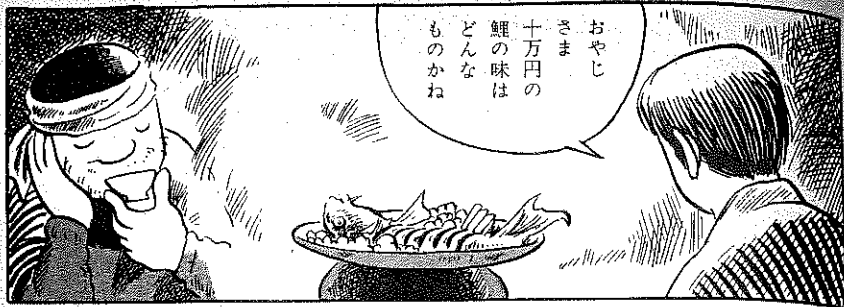
ヤツら
しこたま
もうけて
いるのさ



みろよ
すこい池
だろ







●ほんやら洞のべんさん●ガロ/青林堂 1968 (昭和43)年6月号

